



Title	事実が虚構をしのぐ時代の文学：テインペーミンの抗日時代
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1994, 4, p. 107-163
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99676
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

事実が虚構をしのぐ時代の文学

— テインペーミンの抗日時代 —

南 田 みどり

はじめに

ビルマ現代政治におけるテインペーミンの、種々ある評価の中で、インド亡命時代のそれはほぼ一定する。彼は、連合側とビルマ抗日勢力の協力を「成功」させた「英雄」の一人とされる。また、その活動の全貌は、彼の大部の回想録『戦時の旅人』(1950. 10—1952. 8 連載)が、余す所なく語っているように見える。

しかし、目を小説の世界に転じたとき、小説を愛し、時代の運命を作品に重ねてきた彼が、その「栄光」ある三年間を背景とした小説を書かなかったことへの疑問が生じるであろう。事実が虚構を凌駕する激動期を描くことは、小説の手に余る作業であったのか。

本稿は、テインペーミンの抗日時代とその文学のかかわりから、激動期における小説の可能性を考えるものである。小説が書かれなかった理由も、それが書かれた動機同様考察に値すると考えるからである。

第一章 小説化された抗日 されなかつた抗日

1. ビルマ抗日小説の時代設定

テインペーミンは1993年に19才で短編「愛国者キン」を書いて以来、1940年の長編『現代の悪霊』まで、ほぼたえまなく小説を書き続けてきた。

41年以降、48年執筆の『開けゆく道』までは、小説空白期となった。小説執筆への憧れを残しながら、その筆は政治的宣伝・扇動に駆使された。日本軍侵略による言論統制や戦火に見舞われた42—45年を含むこの期間は、テインペーミンの

みならず多くの作家が、文学から遠ざからざるを得なかった。⁽¹⁾

彼らは大戦後、抑圧されていた42—45年に言及しはじめた。小説の中で、彼らは抗日闘争を、「日本時代」の民衆の受難を語った。この時代を扱う小説の系譜はその後も脈々と続き、軍事政権下の60年代ピークをむかえ、軍の闘争の歴史的栄光の証左として、ビルマ社会主義のイデオロギー建設の一翼をになった。⁽²⁾

こうした長編小説の、時代設定にみられる特徴は、次のように考えられる。第一に、1945年3月27日の抗日蜂起前後をクライマックスから結末に設定した作品が、圧倒的に多い。例をあげれば、42—45年を背景とした『ゲリラ九号』(1946 シュエードン・ビーアウン)、『ガバ』(1947 マウン・ティン)、『山地の闘争』(1963 バモー・ティンアウン)、43—45年の『初夏』(1968 ポウ・ターヤー)、44—45年の『血の河は溢れ』^{○(3)} (1964 ミヤワズイ)、45年を背景とした『夜が明ければ』(1962 ソーウー)などがある。

その他、やや時代をさかのぼって、20年代から45年までを背景とした『同志と妹』(1968 ルードゥ・ウー・フラ)、『我が民族国家』(1973 タキン・ミヤタン)、39—45年の『鮮血の叫び』(1973 ポウ・ターヤー)などもある。

第二に、抗日闘争の勝利で結ばず、後の時代まで描述する小説も少なくない。それらは、39—54年を背景にした『我が祖国』[○] (1961 キンスエー)、42—47年の『闘争の呼び声』[○] (1965 テーマウン)、42—56年の『ブイン』[○] (1963 マ・レーロン)、44—60年の『冬』(1962 ヤウンニー)、44—70年代の『日光ほとばしらば暖まらん』(1972 キンスエー)、45—61年の『三月二十七日』(1966 テッカトウ・ハンワインアウン)などである。

第三に、少数であるが、抗日闘争期を直接描かず、それを重要な回想として語る作品すなわち、戦後における日本知識人とビルマ人のかかわりを描いた『ミスター・キタムラ』(1954 ソーウー)、『血の絆』(1973 ジャーネージョー・ママー)などもある。

抗日小説としては異色の第三群を除けば、第一、第二の作品群は、比重の差はあれ、闘争の有様を描く。さらに、愚直な農民の視点を貫く『ガバ』以外の作品では、そこで描かれる「抗日闘争」が、ビルマ史上誇るべき正義であることを前提としているようにみえる。闘争の困苦をリアルを描く『山地の闘争』や、人間

模様の光と影を描く『闘争の呼び声』から、カレン女性とビルマ男性の恋愛をからめた闘争ロマン『ゲリラ九号』『夜が明ければ』『冬』『三月二十七日』まで、闘争の扱いは千差万別としてもである。

これらの書き手たちは、ボウ・ターヤーのような、親日から抗日へ転じた元三十人志士をも含め、大半が「日本時代」を分別ある年代に体験し、抗日の動きに多少とも関知している。彼らは、ビルマにとっても自己にとっても希有の激動期を、後年虚構に再現したわけである。

2. テインペーミンの小説による抗日闘争

一方テインペーミンの小説群には、この期間を正面から扱ったものが存在しない。この期間に最も近い『東より日出するが如く』(1953. 6—1957. 10連載)は、42年7月の日本軍侵略直後で閉じられ、『開けゆく道』は、45年4月、抗日蜂起成功後に始まる。その後の作品『愛すればこそ』(1951)、「独立すれば」(1948)、「すべて異常ありません」(1949)、「裏切者だとは」(1949)などの時代設定は、1947—49年の範囲であり、抗日時代からは遠ざかる一方である。

『開けゆく道』は、三月抗日蜂起が回想される点で、前述の第三群に含めることも不可能ではない。しかし、『東より日出するが如く』のように、抗日闘争の本格化以前で閉じる作品は、他に類をみない。多数の作家が時代設定に好んで用いた「栄光」の期間を、他のどの作家より闘争に深入りしたテインペーミンが、小説の時代設定から巧みにはずしているのは興味深い。

ただテインペーミンの、小説以外のジャンルには、この期間を扱ったものも存在する。論説『ビルマで何が起こったか』(1942年執筆)は39—42年7月の、戯曲『新しい時代は明ける』(1944年執筆)は43—44年のビルマを、『戦時の旅人』は42年5月—45年10月のビルマ、インド、中国を舞台とする。その他後年書かれた論説集等にも、42—45年の闘争に言及した部分がある。⁽⁴⁾

たしかに日本軍支配下の民衆のたたかいは、『新しい時代は明ける』に描かれている。執筆は44年5月。抗日統一戦線結成の三ヶ月前である。それは、反ファシズムを訴えようとするインド国民演劇協会の依頼で、43年12月から44年1月の同志ティンシュエーのビルマ潜入時の情報をもとに創造された。それはビルマ初

の抗日戯曲となつたが、荒削りで、ティンペーミン会心の作とはならなかつた。⁽⁵⁾

ティンペーミンは、『開けゆく道』『愛すればこそ』『ティーダーピヨン』(1968) のように、昔のシナリオをもとにした長編も書いているが、『新しい時代は明ける』は、小説化されなかつた。「栄光」の期間はなぜ小説とはならなかつたのか。それを考へるひとつの手だては、42年7月以前のティンペーミンの抗日活動とそれを小説化した『東より日出するか如く』中に存在するものと思われる。従つて次にティンペーミンの国内抗日活動と、その反映である『東より日出するが如く』の抗日部分の意味を考へてみよう。

第二章 ティンペーミンの国内抗日活動 1941. 12—1942. 7

1. 人民革命党期 1941. 12—1942. 4

ティンペーミンは41年12月初旬⁽¹⁾、チョーニエインの説得で人民革命党 (PRPあるいはNRP) に入党した。PRPはビルマ社会党の前身で、39年の創設後42年まで独自活動はなく、我等ビルマ人協会（タキン党）に包摂されていたというが「定説」とされる⁽²⁾が、ティンペーミンが入党時受けた説明では、それは、日本で軍事訓練を受ける志士の選出、派遣、タイで義勇軍を結成しその入国に呼応して反英武装蜂起、独立をめざす、「日本軍」の援助を受けた秘密組織であった。⁽³⁾

ティンペーミンは後年、大戦前夜のビルマ左翼を、ウンサンら対日「協力」推進派、ティンペーミンら日英二つの敵打倒派、タキン・ソウラ連合側との協力を主張する反ファシズム・人民戦争派に分類。PRPを基盤とした第一群が最も多かったのは、第一にマルクス主義者の未成熟、第二に1938—39年の1300年反英闘争における秩序的指導の欠如、第三に外国からの武器援助に依存するという武装闘争絶対視に起因すると分析している。⁽⁴⁾

ティンペーミンの日英打倒論にしても、武装闘争重視であることにかわりはない。それは、日英同時打倒は困難ゆえに、まず日本軍の武器援助で英國駆逐後、日本軍侵入前に独立宣言して抗日闘争に転化するという、さらに空想的なもので

あった。39—41年、政治活動から遠ざかっていた彼は、その持論を浸透させるため、PRPの資金や組織を利用しようとした。⁽⁵⁾ そしてPRPの組織体制自体にも、彼のような存在を受けいれる緩慢さがあった。⁽⁶⁾

42年1月、日本軍がビルマ領内に侵入すると、英國は反日タキンの存在をつかんでいたにもかかわらず、反英すなわち親日とみなして全タキンの逮捕にかかる。ティンペーミンの当面の追手は英官憲であった。追手の目をくらますためか、独自の必要性によってか、その後も彼は、ラングーンで地下活動を行ったが、ついに発覚し首都をあとにした。⁽⁷⁾

避難民に紛れて北上した彼は、上ビルマから北部ビルマまで足を伸ばしてオルグした。初めて訪れるモウゴウ、カター、バモー、ミッチーナの地方言葉や文化は、その創作意欲を刺激するが、芸術的作品は書かれず、その筆は宣伝や報告書、演説原稿作成に活用された。⁽⁸⁾

彼のマンダレー入りは、日本軍とビルマ独立義勇軍（BIA）が首都に迫っていた2月以降と思われる。⁽⁹⁾ 後に誤解であることが判明するのだが、「ビルマ独立革命組織」を名乗るPRP上ビルマ支部は、ティンペーミンの来訪に疑念を持っていた。それは、戦火による連絡網寸断にも起因するが、学生運動で名を馳せたティンペーミンが、タキンとしては有名でなかったことをも物語る。⁽¹⁰⁾

タインチッ（愛国）新聞社を基地に活動していた「組織」は、教育・オルグと武器集めの二本柱の活動をしていた。マルクス主義講座、軍事講座、討論会が、学校や寺やタインチッ社で開かれ、各地「組織」の中核となる闘士が養成された。⁽¹¹⁾

中央ナショナルスクール教師を装ったティンペーミンも、講義の他、破壊工作、武装蜂起の準備に従事。⁽¹²⁾ 全国8基地に投下される日本軍の武器、弾薬、食糧等の受領のため、イエワー近くのマハーミヤインの森で、昼は木に白旗をつけ、夜は火をたいて飛来を待った。しかしすべての基地で武器投下はなかった。⁽¹³⁾ この「裏切り」は、対日不信を「組織」全体のものとした。

いまひとつ武器入手ルートは比較的順調だった。ラングーンで同様の活動をしてきたチョーニエインの指導で、植民地正規軍兵士に、武器を持って逃走することを呼びかけ、逃走後野盜^{ダコイ}とならぬよう説得、寺に宿泊所も設けた。脱走兵の

増加に、タインチッ社も危険となり、基地はマソウエイン寺に移った。⁽¹⁴⁾

テインペーミンが教育・オルグの中で持論を訴えたことは想像にかたくないが、その抗日活動は抗日文書の作成、配布で顕著となる。それは武器投下の「裏切り」の前後のいざれかさだかではないが、タインチッ社やマソウエイン寺で印刷されたことから、マンダレー時代であることは明白である。

「組織」ではテインペーミンが情宣担当、タインチッ社主ティンペーが財政担当で、地方篤志家の支援を受けていた。しかし分担の線引きは厳格でなく、ティンペーミンは党の資金を流用して、毛沢東による、抗日を中心とした国内国際問題に関する挨拶のビルマ語訳、日英両敵打倒を指令する文書を印刷発行したのであった。この行動は組織内で黙認されていた。⁽¹⁵⁾

「組織」はたしかに一枚岩ではなかった。3月8日ラングーンの日本軍占領後、モウゴウ刑務所のバモーをラングーンに連行せよという本部の指示に、ティンペーミンは反対し、タインチッ・ティンペーらは従った。さらに、連日の激務と展望のなさに若手が武装蜂起にはやるという事態も生じた。⁽¹⁶⁾しかし分裂には至らず、ゆるやかな結びつきのまま活動は続けられた。

一行はシュエボウに疎開中のディードウ・ウー・バチョウにも入党を訴えている。バチョウは断ったが、中国国民党インド・ビルマ担当王將軍なる人物発行の通行手形を彼らに与えた。⁽¹⁷⁾5月1日、日本軍はマンダレー占領。同地に「組織」の大半は残り、ティンペーミンは潜行した。

以上のようにティンペーミンのPRPにおける抗日は、先進的抗日文書作成という画期的行動を生んだが、全体的に冒險主義的密活動で、戦火に脅える広範な民衆を巻き込むには至らなかった。

2. 中国亡命挫折 1942. 5

マンダレー脱出後ティンペーミンは、日英両敵打倒派から反ファシズム・人民戦争派に移行した。それは、PRP内分派の枠を越えた抗日勢力の再編、国内抗日勢力の代表としてのインド行きへと展開する。

4月29日、マンダレー刑務所を脱出したヌ、ソウ、チョーセイン、ミヤトウイン組⁽¹⁸⁾とティンペーミン、チョーニエインはマンダレー近郊のカバイン村で合

流し、翌日にかけて今後の方向を論議した。チョーニエインがもたらしたビルマ独立義勇軍（BIA）高級参謀アウンサン少将の伝言は、日本は信用できない、中国経由で連合側と接触せよと告げていた。連合側との協力が独立への早道とするソウ、ティンペーミン、日本の与える「独立」にこだわるヌ、チョーニエインと、当面の行動は異なっても、抗日準備を追求することでは一致を見た。⁽¹⁹⁾

ソウ、チョーセイン、ミヤトウインは中国またはインドで抗日活動する決意を、ヌとチョーニエインはアウンサンと協力しながら国内の活動をすすめるつもりであった。ティンペーミンはこの時、国内で秘密活動する意志を持っていた。しかしソウは、彼の抗日文書の冴え、1937－38年の在印時の革命勢力との接触経験、王将軍の中国侵略反対委情宣委員だった経歴等で外国行きを主張。かくしてティンペーミンは戦時の旅人となった。⁽²⁰⁾

彼らは、英印軍後方部隊として退却する国民党軍を追って5月1日出発。3日、バチョウを訪れ同行を勧めたが、バチョウは年令と家族の存在を理由に辞退。コントラクト上の援助と資金を与えた。⁽²¹⁾

5日、一行はシュエボウへ向かう国民党軍第38師団と接触。しかし国民党軍の対応は差別的で、抗日にも関心を示さなかった。⁽²²⁾ ソウは早速同行を断念し、翌6日、残る三人が旅を続行した。

この旅はしかしながら、長くはなかった。待遇は一般兵士並みだったが、バモー、ミッチーナの日本軍占領、カターの激戦が判明後、孫將軍は三人を通訳兼ガイドとして利用しつつ間道から撤退すべく、監視を強めた。三人は、師団とは別に自分達を中国に送るよう要求したが、將軍は彼らが日本軍に捕われ中国軍の動勢を報告することを危惧し、要求を聞きいれなかった。ティンペーミンはそれでも同行するつもりだったが、残る二人に説得され、メエザーで逃走する。⁽²³⁾

体勢を立て直すため、ビルマ中央部に戻る旅が始まった。日本軍を避け、小村づたいに、村人たちの好意に甘んじ宿泊し、彼らと交流し、危険にさらされながら、BIA参謀ボウ・ヤンナイン少佐配下の将校にも助けられて、三人はシュエボウに戻った。⁽²⁴⁾

中国行きの挫折は、国民党が抗日の盟友に足る勢力ではないことを示したはずだが、その後も彼らは、国民党に一定の幻想を抱き続けた。

3. インド亡命決行 1942. 6—1942. 7

中国行きの挫折はむしろ幸いであったといえよう。6月7月における、BIAや日本軍人との接触体験が、ティンペーミンに抗日萌芽の確認と抗日決起成功への確信を与えたからである。6月4日、ビルマ中央行政政府解散、中央行政機関設立準備委設置。15軍飯田司令官はビルマ軍の政治関与を禁止。10日、BIAの生みの親である南機関も解散。PRPの「独立」への道は断たれた。

かくなる上はBIAの動勢が頼みの綱となり、それが思想的にいかなる資質を持ち、いずこへ向かうかが、ティンペーミン最大の関心事となつた。⁽²⁵⁾ すでに4月末、アウンサンの伝言から推測されたものの、ヤンナインとの再会は彼の不安を払拭した。彼はヤンナインと旧交を暖め、ヤンナイン隊の兵士と語らい、日本の「裏切り」は許さないという彼らの意志を知る。⁽²⁶⁾

日本軍に手配されていたティンペーミンを、BIA幹部がかくまい通したこと、彼に抗日勝利を確信させた。彼らにとってティンペーミンは、連合側との連絡をつける貴重な抗日要員であった。シュエボウで再会したアウンサンの言動からティンペーミンは、その対日協力が偽装だと理解した。さらに彼はネーウィン中佐の同行でマンダレーに入り、アマラプラのBIA本部に一泊。翌日アマラプラ南方のボンオウ村にかくまわれる。⁽²⁷⁾ すでにザガインに疎開中のさる親英官僚に売られて、PRP上ビルマ支部の同志ティンダンは日本軍に殺され、タインチッ・ティンペーは、拷問で重傷を負っていた。⁽²⁸⁾

ボンオウ村でマラリアに発熱中のティンペーミンを、タキン・タントゥンが訪れ、インド行きを要請。⁽²⁹⁾ さらに訪れたティンシュエーが、より安全な自分の出身地ビーリンに彼を移送。彼はニョウトゥンの偽名で滞在し、回復後は『ソ連邦共産党史』などを読んで学習に努めた。やがて、各村に潜伏して抗日ケードル養成講座を開いてきたソウも訪れた。ティンペーミンは国内抗日の重要性を説いたが、ソウはレーニンの国外指導を根拠にインド同行を希望。それはティンペーミン個人にとっては、思想建設上プラスだと思われた。⁽³⁰⁾

42年6月17日、ティンペーミン、ソウ、ティンシュエーの三人は、ソウの「弟子」であるBIAのヤンアウン（フラミヤイン）中佐の駐屯するアラカン地方経由でインドに向かった。翌18日、マグエーでソウは、同志タキン・ティンミヤらに

説得され、残留を決意するが、状況把握のためヤンアウンの駐屯地ミンビヤーまで同行した。三人が軍服姿のティンミヤの従者を装ったため、旅は円滑に流れた。先々でBIAと住民の関係や行政の状況が観察された。⁽³¹⁾

アラカンで一行は手厚く遇され、信頼しうる人々に抗日を説いた。ヤンアウンは対日協力を恥じ、一行にカンパを与えた。⁽³²⁾ 抗日にはやるヤンヤウンにソウは、当分対日協力を装うよう指示。一行はヤンアウン隊が抗日の強力部隊となることを確信した。

7月11日、インドから中国行きを追求することを約束し、ティンペーミンとティンシュエーはソウと別れた。彼らのインドまでの旅を、行政指導者チョーインが準備。国境近くまでニヨウトゥン、トゥンウイン兄弟が同行した。英国撤退時アラカンからベンガルのクミラ刑務所に移送されたビルマ人政治囚の釈放を要求して二人に合流させる計画であったが、⁽³³⁾ 旅は少人数が安全と考えられ、兄弟と別れた後は、3名のガイドだけが同行した。髭を伸ばしたティンペーミンはムスリム商人ユースフ、ティンシュエーは中国商人チンセインを名乗り、1942年7月19日、奇しくもアウサン暗殺の5年前、二人はビルマ脱出に成功した。⁽³⁴⁾

ティンペーミンのインド行きは、彼の意志よりも抗日勢力の意志が大きく働いた。彼自身は、国内抗日の意志を待ち、潜伏中にふれた人々の中にビルマ人特有のしたたかさを見い出し、オルグ成功の可能性を感じていた。⁽³⁵⁾

しかし彼も認めるように、当時の抗日派は国内オルグより、外国との「協力」を重視する傾向があった。⁽³⁶⁾ 外国勢力への安易な依存はビルマ左翼に顕著な傾向であった。そしてそれは、日本を「利用」しようとしたPRPの甘さと同質ものであったといえよう。

とりわけティンペーミンにあっては、ナショナリズムの過小評価とプロレタリア国際主義の過大評価が、国外反ファッショ勢力重視の事大主義となってあらわされたと考えられる。それはその後の彼の行動にも、尾を引いた。

第三章 『東より日出づるが如く』に描かれた抗日闘争

1. もう一人の人民革命党員

『東より日出づるが如く』は、三つの部分から成る。主人公ティントゥンは、第一部分1938年までは、平凡な学生、第二部分1938-39年には、中堅学生指導者の典型、第三部分1939-1942年7月では、多数のビルマ人が日本に幻想を抱いていた時代の抗日の先進となった。彼を先進たらしめたのは、多数のビルマ人が体験しなかった経験、つまりPRPの秘密活動の経験に負うところが大きい。

テインペーミンはティントゥンを、彼自身より2年早くPRPに投じた。1939年末のことである。大卒後新聞社勤めの窮屈さにうんざりしていたティントゥンは、夫ある実業家マ・ミヤフミーとシャン旅行で恋愛関係に陥った直後、親友エーゲーから秘密会議に招集される。

そこには、1938-39年に生じた1300年学生闘争時の仲間はじめ青年が30名ばかり集まり、トゥンシェイン（後のヤンナイン）の司会で、反英武装蜂起の是非について自由論議がたたかわされた。賛成派のフラミヤイン（後のヤンアウン）、反対派のエーゲーが論議をリードした。

40年3月、エーゲーはPRPの支部会議にティントゥンを招集する。先日の秘密会議が選出の場であり、ティントゥンは党員に選ばれたのであった。

カマーユッ市場近くのとある庭付き家屋には、公務員のチョーニエインも出入りし、15名の青年が集まっていた。

「この集まりでは知人同士でも挨拶せずに済むらしい。知人でない場合も紹介しない方が賢明らしい。しかし心の中では互いに知人も同然である。互いの腕の血をすり合い、血盟の儀を結ぶまでに固き絆の同志たちである。」⁽¹⁾「正義」の陰謀活動への期待に、彼の胸は高鳴った。

武装蜂起計画の中でティントゥンは国外組を志願したが容れられず、地下印刷所設立の任務を与えられる。彼はマ・ミヤフミーに出資を依頼するが、目端のきく彼女は快諾せず、逆にティントゥンの生活援助を申し出る。彼は新聞社をやめ、革命活動の時間的自由とひきかえに、彼女の囲い者となる。

この頃の彼の活動は、我等ビルマ人協会本部で「労働者討論会」の名目で開か

れるマルクス主義講座で学習することだった。テキストは『共産党宣言』『何をなすべきか』『帝国主義論』『戦争と第二インターナショナル』『賃労働と資本』、講師はタキン・ソウ、タキン・チョーセイン、タキン・フラパー、タキン・ボウラであった。

講師が共産党系であることは、BCPとPRPがタキン左派との名目で相互乗り入れ講座を開催していたこと物語ろう。その後まもなくソウが逮捕されたと述べられるので、それは1940年6月-8月のタキン大量検挙以前のことであったと考えられる。

41年6月ティントゥンは、潜伏中のタキン・バヘインに呼び出される。バヘインは「同志愛」から忠告する。「人妻との間を疑われている政治指導者になど安心して国家をまかせられない」と。⁽²⁾ このことは共産党系のバヘインのPRPへのかかわりをもほのめかす。バヘインの忠告に嘘で応じたティントゥンは、同志を欺いてまで男の誇りを失っている自分を嫌悪した。

革命と退廃のはざまを揺れるティントゥンの混乱を、ティンペーミンは父の死による帰省でひとまず收拾する。ここでティントゥンは新たな気持で村人と親しみ、初めて彼らに政治を語り、村を歩いて農民の汗の滴を見、机上の理論を血肉となした。

41年7月ティントゥンの村へ、PRPから同志ネートゥン（偽名）が、日本軍からの武器投下地点の下見に訪れる。2人は狩猟を装って村人に案内させ、セーダー村北方のマハーミヤインの森の中の丘に地点を定めた。

「早く決起してイギリス政府を打倒するのだ。そう考えると、ただ心がはやつた。それが正しい考え方か否か、もはや深くは考えなかった。」⁽³⁾ 蜂起は日英開戦前後と定められ、ティントゥンは、戦争の恐ろしさも忘れてひたすら開戦を待った。

しかし彼には一抹の不安もあった。我々を助けて日本軍に何の得があるのかと。日英両敵打倒派のネートゥンは、日本軍の敵である英國を我々が攻撃すること自体彼らにとって最大のメリット。今は我々の武装蜂起が最重点。「後の問題は後で解決するでしょう」⁽⁴⁾ と楽天的である。かつてファシスト日本を英帝同様に憎悪したティントゥンも、蜂起を目前にして日本を信頼すべき仮の友人と見るに至

る。

ラングーンに戻ったティントゥンは、タキン党本部に出入りしてPRPの連絡を待つ。指導者逮捕後の本部は閑散として、親英・反ファシズム派の新米議長タキン・ティンマウンザーが詰めていた。戦争の悲惨さを説くティンマウンザーの声も、大戦の波及を待ち望むティントゥンの耳に入らなかった。

1300年闘争挫折後、広範な大衆のオルグ不足を認識しながらも、武器入手の可能性を前にして、蜂起後の独立への展望を保留したまま急速に対日協力に傾く青年の典型を、ティンペーミンはこの時期のティントゥンの中に描いた。

2. 作者と主人公の共通体験

1939年から41年のPRPの上述のような時代、ティンペーミンは政治活動から遠のいていた。ティンペーミンがPRPに入党した41年12月を境に、作者と主人公は次第に接近する。ティンペーミンは、41年12月以降のティントゥンに自己の体験を重ねる。それはラングーン空襲と日本軍の「裏切り」である。この二体験が、ティントゥンに反戦・抗日の心を呼びます。

41年涼季初期というので11月末か12月初旬、エーグエーと連絡のついたティントゥンは、シュエゴンダイン通りチャウタッチーパゴダ付近のPRPの新しいアジトを訪れる。そこではタキン・チッ、チョーニエインらが活動し、ティントゥンにはパンフ配布の任務が与えられた。それは「革命」というタイトルで、ナチスと闘うソ連、日本軍国主義に抗する中共を讃えながらも、英帝打倒のために外国からいかなる援助も得よとの決議が載っていた。

収入の断たれていたティントゥンに、エーグエーは「真新しい」2チャット札10枚を与える。日本が与える闘争資金200万のうちの手付金の一部だという。虫のよすぎる話を訝るティントゥンにエーグエーは、英帝を追い出し日本軍の侵入を食い止めることは可能ゆえ活動に励めとさとす。そして今後毎週水・土曜の夜7時から9時にアジトに来るようになると、合い言葉を教える。この日を最後にティントゥンはマ・ミヤフミーとの関係を完全に断った。

12月8日の開戦以来、日本に有利な流言飛話、古謡の親日的解釈の流布、タキン党非合法化の中、人々は急速に親日に傾倒する。官憲に追われるティンマウン

チーをカマーユッ地区にかくまってやったティントゥンは、ファシストを憎み怖れるティンマウンチーや戦火におびえる住民たちを慰撫する。

「日本が我が国を占領するんじゃなく、われわれビルマ人が我が国を我々のものにするんです。だから日本が来るって言わないで、ビルマが来るって言ってほしいですね」⁽⁵⁾と。

しかし、まずラングーン空襲が彼を冒険の夢から覚めさせる。シュエーダゴンパゴダ北の中華寺隣りの二階家に移ったアジトで、タキン・チッからモウゴウで同じく武器を受け取るタキン・ターキンとタキン・ミヤに紹介された翌日、出発準備中のティントゥンを空襲が見舞う。

ラングーン駅で目撃した生地獄に、彼は生まれて初めて前身総毛立ち、諸行無常、一切行苦、諸法無我の三法印を無意識に唱えている自分に驚く。空襲はまた、彼の親しい女友達マ・ミンターに死をもたらし、彼を数日間で成熟した大人に変えた。

貧しい避難民のひしめく列車、荷物を満載した上、西洋犬までのせて「逃走」するイギリス人や政府官吏の車、バスにも汽車にも乗れず徒步で行進する「犬以下の」インド人労働者、避難民に飲食物を喜捨する沿線住民、それらと共に北上したティントゥンは、指定の地点で三日三晩武器を待ち、徒労に終る。そして「日本が我々の如き反植民地主義的愛國者の手に武器を渡すわけがない」⁽⁶⁾と判断するに至る。

ここでティンペーミンは彼をマンダレーに出し、PRPの活動に加わらせる。彼をティペーミン自身と接触させる。彼はティンペーミンの傲慢さに反撥しながらもその二つの敵論に納得する。ティンペーミンは、自己の体験をティントゥンに重ねて急速に成長させ、自己の分身となした。42年3月、彼はティントゥンを、ファシストの牙城ラングーンへ、PRPの連絡員として放つ。それはインドに行かなかったもう一人のティンペーミンの姿であった。

3. 分身によるいまひとつの抗日

ティンペーミンは、『ビルマで何が起こったか』『戦時の旅人』で叙述した自己の体験や見聞を、ティントゥンのラングーンへの旅にも注ぐ。

マンダレー、ターズイー、メイティラ、チャウパダウンを経て何日もかけヒンダダへ着いたティントゥンは、BIAのヤンナイン（トゥンシェイン）に再会する。この戦争で東の間にせよビルマ人が体験した自治は、ティントゥンの心を打つ。さらに彼は、対日不信を秘めて「他の誰のためのものでもないビルマの独立のための闘い」を展開しようとするヤンナインを理解する。

「もちろんあとになってみれば、そんな信念は甘っちょろいと言われるかもしれぬ。ファシスト日本との協力からビルマ独立など絶対生まれぬと政治的慧眼を持って批判する者もあろう。だが当時は、ビルマ独立軍の間でも、青年学生やタキンの間でも、そう固く信じられていたのである」⁽⁷⁾と。

こうしたティントゥンの理解は、作者自身の理解でもあった。ティントゥンはヤンナインの同行の勧めを断った。彼はPRP本部で、これまでの事件を総括し、今後の方針を考えることに希望を託していた。

ヤンナインは彼に、英國紙幣と日本軍票を与え、通行の便もはかった。ヒンダダからターヤウォー、トンゼエを経てラングーンへ至る道中の見聞、あるいは出会った人々の見聞として叙述される日本兵の姿は、全てのビルマ人を使用人とみなし、マスターと呼ばれることを好み、労働にもわずかな賃金しか払わず、人々の所持品を略奪し、椰子を取るために木をなぎ倒し、タキン指導者に女探しを命じ、裸で水浴し、便器を食器に用いる蛮族であった。

表面上は友好を装って陰で唾を吐くしたたかな民衆がいる一方、日本軍に追随して暴利をむさぼる商人や、日本軍の威を借り高圧的なBIA将校も見聞される。希有の体験を経てティントゥンは、こうしたビルマ人すべてに寛容かつ思慮を持って対応できるようになっていた。

「身を持って戦争を体験していない頃なら、そのような嫌悪すべき事態に会えば、胸中に收めず吐き出して非難したであろう。今はじっと胸に收めておいた。ことの善悪を心で見きわめ、そっと批評していた。」⁽⁸⁾

5月頃彼はラングーンのカマーユッ地区に戻る。暮しにくさを嘆きつつ日々の営みに追われる民衆の中で、ひっそり息をひそめながらも、同志との連絡もつかず、彼は孤独に沈んでいた。

「タキンも学生もBIA将校も、そして全国民が『我々は一体誰に依拠すべきか』

自問し自答すらできぬ時期であった。ぼくは尋ねたかった。討議したかった。相談したかった。しかし信頼するに足る人物には出合わなかった。ぼく同様に感じる人間はいるかもしれない。しかし彼らが敢えてぼくを信頼するであろうか。誰を信じればよいかわからぬ時期であったのだ。」⁽⁹⁾

ティンペーミンはここで、彼にティンマウンダーをひきあわせて光を与える。二人はここ半年の体験を交流。以前は一致しなかった二人の意見が、今や接近していることをティントゥンは見い出す。しかし、冷静なティンマウンダーと対照的にティントゥンは、何かをなすべきなのに何をすればよいかつかめないことを焦る。

ティンマウンダーは先走った行動を戒め、慎重に時を待つよう説き、我等ビルマ人協会の反ファシズム的系譜をたどってみせる。しかし現実には協会がファシストの侵入を帮助する結果になったと迫るティントゥンに、ティンマウンダーはいう。かつて自分がティントゥンを説得できなかつたように、ファシストの侵入は押し留めることが不可能な状況だった。アウンサンの日本行きも計画外だった。今は頭を冷やして味方の揃うのを待てと。説得はテントゥンを鎮静させる。かつての恋人マ・キンティックの一家がやがてティンマウンダーと同居するという知らせも、ティントゥンに希望を与える。

作者はその日ティントゥンをエーグエーにも再会させる。BIAに入って抗日の機を待っているエーグエーは、BIA解散後、再編ビルマ防衛軍（BDA）に入隊すべく待機中であった。⁽¹⁰⁾ 二人は体験を交流し、互いに信頼すべき同志であることを確認する。

「我々二人は今まで同じ水の流れに乗ってきた。泳いできた。今や我々は心底唯一無二のものに融合したのである。」⁽¹¹⁾

新たな局面は、カマーユッにおける日本兵の新妻暴行事件によって展開する。犠牲者の夫ティンペーとティントゥンは、日本兵に瀕死の傷を与え、エーグエーに処理をまかせて逃走する。途中再会したマ・ミヤフミーにいったんかくまわれるが、ティントゥンは彼女の世界から遠ざかるべきだと判断し、ティンマウンダーのもとに向う。その路上で作品は閉じられる。

ティンペーミンにとって抗日闘争の起点だったPRP入党は、ティントゥンに

とっては誤まる冒險主義の起点であった。作品の終末は、ティントウンの眞の抗日の起点であると同時に、その人間的成長のこの段階での完結を示す。民衆を信頼せず、「自覺した」少数者による蜂起で独立が獲得できるという思いあがりから、流れをあえて押し留めず、現状をありのままにうけいれ、絶望として見する中で光を獲得しようとする、他者への寛容と信頼に満ちた成熟した人間像が提示される。

そのような成熟した人物のさらなる「英雄的たたかい」が描かれず、なぜ42年7月でこの作品が終了したのか。そのわけを考えるには、42年7月以降の作者の体験をあきらかにすることも必要であると考える。

第四章 インドにおける抗日活動 1942. 7—1945. 3

1. デリーのとらわれびと 1942. 7—1943. 1

日本の魔手からの脱出は、新たな敵との対決を意味した。それは英國政府、中國国民党政府、シムラのビルマ亡命政府など、むき出しのファシストとは異なる巧妙な帝国主義者、反共民族主義者たちであった。テインペーミンの抗日活動も、脱出早々暗礁に乗りあげた。

テインペーミンとテインシュエーは7月20日警察に拘禁。数カ所で調書を取られながら8月3日、デリーに送検。さらに日本軍政下のビルマの状況を詳細に聴取された。⁽¹⁾ テインペーミンはインドの抗日活動の第一歩として、8月9日ボンベイで開催予定の国民会議大会で抗日を訴えようと考えていた。しかし当局は彼を、デリーのパンジャブホテルに軟禁し続けた。

テインペーミンは、こうした英國の抗日への無理解を、印緬両人民の団結を怖れるがゆえの仕うちと解釈していた。⁽²⁾ しかし、当局が二人を軟禁し続けたのは、二人の報告の詳細さゆえに、二人を日本軍が放ったスパイだと信じたためであった。⁽³⁾

8月9日早朝の国民会議派指導者逮捕によって、テインペーミンの来印の目的のひとつであった国民会議派との接触の道は閉ざされた。彼が『ビルマで何が起こったか』を書いたのは、その後である。そこには大会で訴えるはずの思いが余

す所なく語られた。それは、英國の弾圧が増せば増すほどガンジーの「インドを出ていけ (Quit India)」路線に油を注ぐ当時の情勢の中で、民族主義の過度の強調がファシズム容認につながる危険性を指摘した。

それはまた「インドを出て行け」大合唱の中で孤立するインド共産党 (CPI)へのエールでもあった。しかし、彼にとっては国民会議派との接触にも増して重要なCPIとの接触も、党合法化直後の混乱で、思わしく運ばなかった。⁽⁴⁾

『ビルマで何が起こったか』がきっかけで、テインペーミンは来印中のジャーナリスト、エドガー・スナーと知己を得る。スナーは出版社を紹介し、序文を執筆した上、テインペーミンにCPIデリー市委員会指導者サラ・デヴィことサラ・グプタを紹介した。彼は『ビルマで何が起こったか』のタイプ印刷原稿と、当局への報告のコピーを彼女に渡した。しかし党との関係は、それ以上に進展しなかった。

その理由としてテインペーミンは最初、英当局の妨害を考えた。しかし1943年に判明したこととして、ゴシャールの中傷をあげる。⁽⁵⁾ たしかに英当局は、国民会議よりむしろCPIとの間に「理解」を成立させていたがゆえに、テインペーミンのCPI接近を規制する強力な動機はない。実はこれに難色を示したのは、シムラの亡命ビルマ政府であった。シムラはテインペーミンの出国動機を疑い続け、『ビルマで何が起こったか』をもってしてもその態度を軟化させなかった。⁽⁶⁾

42年9月、英当局はテインペーミンとティンシュエーにシムラ訪問を命じた。プロパガンダの駒として活用するためにも、彼らとシムラとの「理解」が先決と考えられたからであろう。標高7000フィートのヒマラヤの避暑地で、二人はデリーの警官からシムラの警官に引き渡された。

シムラ訪問は、ビルマ総督ドーマンマミス表敬訪問を意味するはずであった。しかし「ズボンがずり落ちそうなままでブーツをはいて」⁽⁷⁾ 逃走し、ビルマをファシストの軍靴の下に置き去りにした植民地政府と、それを第一の打倒対象としたPRP党員との間に和解は成立しなかった。滞在中テインペーミンは総督を訪問せず、総督も出頭を命じなかったのである。⁽⁸⁾

シムラでテインペーミンは、かつて敵対した高官をも含め、旧植民地官僚と淡々と接した。潤沢な生活費が戦後ビルマの負債となることも知らず無聊の日々を送

る官僚たち、復帰後の治安対策を練る警察官僚、抜け目なく再建計画を練る英資本家、避暑に訪れるインド富豪。読書、映画、散歩に費やされるシムラの日々は、彼の「生涯最も暇な時間」となった。⁽⁹⁾

11月中旬二人はデリーに戻った。英国情報省のビルマ向けプロパガンダに協力を依頼されたのである。二人の身柄は情報省極東ビューロー (FEB)⁽¹⁰⁾ ビルマユニットの管轄下に移った。このことは、二人の「スパイ容疑」が晴れたことを意味するであろう。しかしそれは、英國当局が二人を「協力者」と認めたことを意味したわけではなかった。FEBのチーフ・グラス (Leslie Glass) は、あくまで二人を雇用するつもりであった。テインペーミンは、ビルマ抗日運動の代表という自負のもとにそれを拒否。身分はアドバイザーとなった。⁽¹¹⁾

二人は宣伝ビラ「風神」^{レーナフター}の作成と、ビルマ向けラジオ番組制作にかかわった。⁽¹²⁾ 英国側の視点と抗日運動家の視点はしばしば齟齬をきたした。ビラはもとより、テインペーミンがマウンマウンニョウの名で時おり出演する放送に、自己の意志を注入することはなおさら困難であった。

インドにおけるテインペーミンの抗日はこのような域にとどまつてはならなかつた。彼はビルマの同志との約束どおり、中国行きを追求し続けた。中国領事館と接触し、王將軍の代理人ルーなる人物に、重慶行きを希望。ルーは英当局に二人の引き渡しを要求していた。⁽¹³⁾

中国側の後押しにもかかわらず重慶行きが難行したのは、ドーマンスマスの意志が働いていたからであった。総督はすでに42年4月、タキンたちが、王の援助で中国へ抗日運動に出かけようとしたことにも不信を持っていた。彼は、タキンが中国で反英プロパガンダを展開することを懸念していた。彼は42年10月の時点でも、タキンの抗日の意志を疑っていたのである。そこにはまた、英國の対中不信や、英米中三国間の戦後政策を含めた複雑なせめぎあいも存在した。⁽¹⁴⁾

総督を説得したのは謀略機関136部隊のチーフ・マッケンジーであった。136は作戦上国民党の協力を必要としていたが、中国情報部のヘッド戴笠^{タイリー}は、対英不信のため非協力的であった。王將軍が二人の身柄を中国に託すか否かで英國の誠意を試していると、マッケンジーは主張。総督は不承不承同意した。⁽¹⁵⁾

そうした応酬をテインペーミンが承知していたか否かは、その回想からうかが

えない。彼が承知していたにせよ、二人の身柄はこの時点ではFEBから136の下に移ったと考えられる。136はFEBとのコネで、ティンペーミンとティンシュエーの存在に注目したといわれる。FEBのグラスは、分別があり可能なプロパガンダの働き手ティンペーミンを失うことを残念がったが、さらに高度な政治部門に送りこむことを歓迎したという。⁽¹⁶⁾

英中協力の駒であるティンペーミンが、「厚かましくも」英当局に告げた中国行きの「独自」の目的は第一に、中国はインドよりビルマ向け抗日プロパガンダの従事者が少ないので自分の存在がより必要とされる、第二に、中国兵の態度がビルマ派兵時より改善されたか否かに関心がある、第三に、工業合作社の見学、第四にビルマ再建後の経済建設の学習、第五に、ビルマの友好を中国に示すことで戦後の中国の脅威を減じることができるなどであった。⁽¹⁷⁾

彼にはまた、ビルマ左翼が果たせなかつた中国共産党とのコンタクトをとるというさらなる目的があった。彼はCPIデリー市委員会を経由して、ポンベイのCPI本部に中国行きを伝えた。書記長ジョシーは第一に、英・国民党の援助よりも自国の解放勢力を第一義とすること、第二に、抗日のため誰と手を握ってもよいが自分を売らぬことという助言と、周恩来あての紹介状をよこし、中共にインドの状況を報告するようティンペーミンに依頼した。大国の思惑がらみの中国行きの実現は、亡命以来初めてCPIとの、実のある接触をもたらしたのであった。

2. 重慶時代 1943. 1-1943. 8

43年1月8日、ティンペーミンとティンシュエーは、荷物検査免除の特別旅行者として、四川省重慶に到着した。英國と国民党政府は彼らに、反英宣伝をしない、中共と接触しないという二つの制限をつけた。⁽¹⁸⁾ 前者は守られ、後者は密かに破られた。すなわちティンペーミンの重慶生活は、王將軍の客として前述の訪問目的を前面に立てつつ、中共との接触やその理論と実践の学習をとりいれたものとなり、シムラやデリーの4ヶ月と比較すれば前進をみたのである。

重慶到着後ほどなく国民党の反人民性を見て取り、同党への期待が薄らぎつつあった⁽¹⁹⁾ ティンペーミンは、王の勧めで我等ビルマ人協会親連合セクト代表の名で、⁽²⁰⁾ ビルマ抗日計画を作成。1月26日蒋介石に提出した。そこで彼は、ビル

マ国内の抗日運動の存在を指摘、さらなるオルグとゲリラ隊の組織の必要性、ゲリラへの連合側の武器援助、戦後自治の約束、ティンシュエーの連絡係としてのビルマ潜入などを提案した。王は蔣介石と英國の意向を思はばかって、一部加筆訂正させた。4月、蔣介石は、英國の合意が得られなかつたと、計画を却下する返答をよこした。⁽²¹⁾

英國は、ビルマ潜入を希望するならウインゲート隊に加われと主張。同隊を、人民戦争を装いながら革命勢力との協力を回避する帝国主義の傭兵隊とみるティンペーミンは、即座に拒否した。⁽²²⁾ 彼は、中國のラジオや新聞で抗日宣伝することを希望したが、英國の反対でこれも却下された。⁽²³⁾ 工業合作社見学許可もおりなかつた。⁽²⁴⁾ 滞在が長じるにつけ、英國と国民党の二重の束縛、国民党の二面性が鮮明になつていった。⁽²⁵⁾

重慶生活の一筋の光明は、中国共産党との接触であった。当時重慶には、国民党政権に派遣された共産党代表団首席周恩来が駐在していた。ティンペーミンは、ユダヤ系アメリカ人記者イスラエル・エプスタインを介して周恩来の秘書の陳^{チャン}家^{チャイ}康を知り、この二人を重慶における親友とみなした。⁽²⁶⁾

陳の依頼でティンペーミンは、42年8月以降のインド情勢の報告書を周に提出している。⁽²⁷⁾ 周との会見は、蔣からの返答の後、エプスタインと陳の努力で実現された。周は、ビルマ共産主義者の一部が、反英武装蜂起のためファシストと組んだことを驚き、その誤りを指摘し、自國人民に依拠し、外国の援助に頼りすぎぬよう說いた。ティンペーミンは、ティンシュエーのビルマ潜入に協力を依頼したが、中共は雲南に拠点がなく、北京から海路ビルマに出るルートは危険で、諦めねばならなかつた。重慶にいる意味を失つたティンペーミンは、王にインドに戻ることを希望したが、帰印までさらに数ヶ月を要した。

この期間にティンペーミンは、エプスタインと陳から中共の指導する抗日闘争、新民主主義、解放区の新生活、蔣支配地域のオルグ状況などを学んだ。一方王から外務省図書館の閲覧許可を得て彼は、中國国内で発禁となつてゐるCPIの「人民戦争」誌はじめ外国共産党紙・誌を読む。これらの学習は非常に有効であったといふ。⁽²⁸⁾

帰印までの期間、彼は中国現代劇や抗日時代劇なども鑑賞した。戦時下の重慶

で映画は少なく劇が盛んであり、それらは自然な装置や迅速な場面転換などで水準が高いという印象を彼に与えた。⁽²⁹⁾ この経験は、ティンペーミンの抗日劇『新しい時代は明ける』にも影響を与えたと考えられる。

この他彼は、在中ビルマ華僑から厚遇され、王の許可を得てその一人の家に居を移した。また日本軍相手の反ファシズム宣伝活動家日本人や朝鮮人革命家とも交流を持った。帰国實際には、エプスタインの同伴で宋慶齡をも訪問している。⁽³⁰⁾

ビルマ抗日運動にとっては目に見えた成果にならなかったとはいえ、ティンペーミンは中国から有効な文書をインドに持ち帰った。CPIとBCPあての中国情勢の報告、⁽³¹⁾ 中共発行文書や毛沢東の新民主主義文献の英訳などが、ティンシュエーの下着に縫い込まれ、^{タリード} 戴笠の部下たちに指一本もふれられぬまま持ち出された。⁽³²⁾ 43年8月のことであった。

ティンペーミン重慶行きは中国共産党との接触を最終目的としていたとはいうものの、彼が事前に国民党政府の実体をどの程度まで把握していたのかはさだかではない。⁽³³⁾ 王將軍のタキンへの甘言の影に、その空前絶後の腐敗政治やファッショ的テロルや共産軍殺戮も、かすみがちだったのではなかろうか。重慶の生活体験による国民党への「失望」は、彼がそれだけの期待を抱いていたことを意味する。国民党への幻想はこれによって断たれたが、CPIの「同志的援助」や、国民党政府より「ましな」英國との協力への期待は、依然としてその心に灯をともし続けた。

ところでティンペーミンが回想で巧妙な秘密行動として語る、カルカッタやデリーでのCPI、重慶での中共との接触もまた、英中両情報部の計算のうちだったのであるまいか。百戦練磨の大元情報部がこの小国の二人の行動の一部始終を察知することは、さほど困難ではない。二人を泳がすことで新たな情報入手のメリットが予測されるほど、二人の「抗日活動」は無害なものであった。ティンペーミンが抗日にいささかの気骨を示すには、今しばらくの戦況の変化が必要であった。

3. 国内抗日勢力との接触 1943. 9—1944. 6

二度目のデリー滞在は、ラジオ番組とパンフ作成協力を基本としながらも、英國やCPIとの関係改善とティンシュエーのビルマ派遣実現など、重慶訪問以前と比べ前進がみられた。

帰国後も要求し続けたティンシュエーのビルマ派遣は、43年11月に認められた。ティンペーミンはそれを、英國が二人をビルマ抗日勢力の代表と認めたためとみなし、自分たちの粘り強い説得が功を奏したととらえた。⁽³⁴⁾ 136部隊の方でも、ティンペーミンらの協力なしではビルマ本州の情報入手と親連合レジスタンスは不可能との判断に至ったからでもあった。⁽³⁵⁾

ティンシュエーはただちにビルマ潜入のための訓練に赴き、ティンペーミンは抗日「代表」らしくデリーに残留してやや自由な宣伝活動に従事した。当局は彼に、その年8月に樹立された親日かいらい政権についてや、今後の宣伝方法、再建への意見を求め、シムラの警察官僚も彼の名を不隠分子リストからはずし、彼を招いて国内での調査を依頼するなど、態度を改めた。ただしティンペーミンは彼らとの交流に冷淡で、総督訪問もおこなわなかった。⁽³⁶⁾

英國側はティンシュエーのビルマにおける行動をことこまかに指示しなかった。彼の任務は抗日勢力との接触後今後の協力体制を作ること、BDAの決起の兆候の調査などとされた。

42年7月以来1年半、国内抗日勢力との関係は杜絶していたため、英当局は危ぶんだが、ティンペーミンはティンシュエーの連絡相手に「対日協力者」・アウンサンとタントゥンを選んだ。ソウは潜伏中で居所がつかめないと思われた。この選択は彼の出国時の感触をもとにしたものであった。ヨーロッパの反ファシズム統一戦線を手本とした抗日統一戦線の結成をよびかけるティンペーミンの手紙、ジョシーの親書を携えて、ティンシュエーは12月4日、ベンガル湾からアラカンに潜入するためカルカッタへ向かった。

留守中CPIとの接触につとめたティンペーミンが44年1月、ボンベイの党本部からデリーに戻った時、ポウ・ヨン（ティンシュエーの偽名）無事帰還の報がもたらされた。ただしポウ・ヨンの扱いの主導権は英國側にあり、対面は到着の報の約一週間後、デリー北方のメラートでなされた。

ここでティンペーミンは、ティンシュエーとその同伴者—新妻ミャイー（偽名キンスナー）、アラカンの抗日闘士ニヨウトゥンと5日間すごし、ビルマの状況を聞き、持ち帰られた書物や手紙を受領。⁽³⁷⁾ 今後の方向としてビルマとの無電連絡、宣伝、抗日蜂起の準備を確認。さらに聽取される三人を残し、デリーに戻る。約10日後、ティンシュエー夫妻もデリーに帰還。ニヨウトゥンは別行動でカルカッタに赴き、さらにアラカン蜂起準備のため国境へ向かった。

ティンシュエーのビルマ行きは第一に、英國にとって貴重なビルマ本州の情報をもたらし、第二に抗日統一戦線結成にとって決定的事件となったというが、⁽³⁸⁾ それはまたティンペーミンに執筆意欲を促す材料をも提供した。彼はラジオと「風神」を通して、もはや制限なしであからさまに抗日を訴えることができた。さらに彼は、論説「かそけきバモー」、大東亜諸国首脳会議（43年11月5－6日東京）出席のバモー、ボース、汪精衛の会話を構成したラジオドラマ、戯曲『新しい時代は明ける』などを書いた。⁽³⁹⁾

この期間彼は再び、植民地政府警察庁の招待でシムラを訪れた。折しも西部戦線解放の報に、英國勝利期待への高揚に支配された時期で、前回の訪問と比べれば友好度は互いに増した。とはいえた彼らの行動の自由には限界があった。彼はインド在住ビルマ人を組織して抗日会議を結成することを提案したが、シムラは許可しなかった。それ以上に不自由なティンシュエーは、ティンペーミンのシムラ滞在中出席させられた136の講座における、英國人講師の不遜な態度に傷ついた。⁽⁴⁰⁾

ティンシュエーのビルマ派遣は、ティンペーミンを仲介とした印緬両共産党の絆を強める契機となった。英國やシムラが油断ならぬ「同盟者」である分だけ、CPIは孤独なティンペーミンの信頼しうる友人となった。デリーのビルマ人に伏せたティンシュエーのビルマ行きも、CPIには事前に報告された。CPIもまた、重慶での彼と周恩来の接触でティンペーミンについての評価を改めたと思われる。

ティンシュエーがビルマに発つと、ティンペーミンはニューデリーから、CPI党员の多いオールドデリーのビルマ人宅に移り、デリーの党员と交流を深めた。彼は「人民戦争」誌に、ビルマにおけるファシストの弾圧、ビルマ人にファシストを受容させた英國の責任などについて論説を書いた。

さらに彼はジョシーの依頼でインド各地の大学を回り、ボース派や国民會議派学生に野次られながら、全インド学生連盟（AISF）主催の抗日講演をおこなった。その後ポンペイのCPI本部に滞在し、党員の仕事や生活にふれた。彼はデリーでは、党員たちが宗教的相違を認めながら一致点で行動する同志愛を、ポンペイでは新しい女性観を学び、それらをCPIの成熟のあらわれと考えた。⁽⁴¹⁾

ティンシュエーの帰印後もティンペーミンは、報告を兼ね今後について相談するためポンペイを訪れている。彼はジョシーの依頼で「人民戦争」誌に中国事情を執筆後、5日間でビルマ報告をまとめ、⁽⁴²⁾ ジョシーと一日一時間討議して抗日計画を練った。ティンシュエービルマ行きの際のジョシーのBCPあてのメッセージは、基本的には自国の解放勢力に依拠し、可能ならば外国の援助を受けよというものだったが、ビルマ抗日計画に対してジョシーは、平和革命唯一論⁽⁴³⁾の「援助」を与えた。

全国一斉蜂起、抗日ゲリラとBDAの合併を主張するティンペーミンに対し、ジョシーは無用の流血回避を理由に、連合軍の隣接地域での個別蜂起、BDAとゲリラ隊の植民地正規軍への偏入を主張した。ただこの時のジョシーは、体験的対英不信によって、蜂起後の武装解除の是非については結論が出せないでいた。⁽⁴⁴⁾

協調主義が党の「成熟」のあらわれとして、干渉が「援助」として受容されたのは、たしかにビルマ共産主義運動の歴史の浅さによる事大主義に起因することは否めない。そしてCPIとの日常的接触から得たティンペーミンの体験的信頼感も、それを補強したものと思われる。このようにしてティンペーミンがビルマに伝えた平和革命唯一論は、国内で無条件に受け入れられ、抗日闘争の方向を決定づけることになる。

4. 蜂起成功・革命流產 1944. 6—1945. 2

二度目のポンペイ訪問から戻ったティンペーミンは、ティンシュエー夫妻とカルカッタ南端のベハラ基地—ティンペーミンの言では抗日ビルマ国外連絡本部—へ移った。それは国内の急速な抗日統一戦線結成の動きに呼応しつつ、ジョシーと136側の奇妙な一致点たる個別アラカン蜂起準備推進のため設置された關士養

成所であった。44年中頃のことと思われる。⁽⁴⁵⁾

そこでは、136の連絡係バタスピー少佐 (Eric Battarsby) が訪れる他は自由であった。しかしティンペーミンは予期せぬ伏兵・脊髄カリエスに見舞われ、44年9月から一年間、ベッドの上で抗日「活動」することになる。⁽⁴⁶⁾

絶対安静を告げられた日から、彼は密かに英語論文「英國とビルマ人民のさらなる相互理解と協力に向けて」を書き、数日後の9月5日完成。顔と手を除いて全身を石膏で固定した状態に入った。

論文は英軍当局と連合軍東南アジア司令部に提出された。それは日本軍との戦闘長期化の見通しのもと、英国との摩擦を避け、8月に結成されたばかりの抗日統一戦線AFPFL（反ファシスト人民解放連盟 当初の呼称はファシスト撃滅組織AFO）に物質的援助を要請する目的で、平和的に独立に至る道を説いていた。それはCPI、AFPFL、BCPにも送られた。ビルマ国内では議論もなく普及されたという。⁽⁴⁷⁾

ベハラ基地ではさみだれ式に集結していた青年たち⁽⁴⁸⁾の教育に10月から着手した。それは政治・思想構義と討論から成り、終了後ティンシュエーと闘士たちはパラシュート訓練を受けにペシャワルへ向かった。11月メンバーの一人がペグー降下に成功して、空路本州のAFPFLとの連絡も可能となった。⁽⁴⁹⁾

アラカン蜂起は英国と抗日勢力協力の試金石と考えられた。コックスバザールからマウンドー、ブーディダウンへ進む英印軍とスイットウェから上陸する英海軍に呼応してゲリラは、スイットウェ北方ミョハウン、チャウトー、パレッワを制圧することとなり、136とニュウトゥンとティンペーミンの間で、作戦や物資輸送計画が練られた。⁽⁵⁰⁾

ビルマ人主導の蜂起を計画していたティンペーミンらに対し、英國側は英軍人の参加・指導を主張。ティンペーミンらの反対の結果、連合側との連絡係としての英軍人の同行、食料武器の無条件提供で一致をみた。⁽⁵¹⁾

12月、136はカリュー少佐 (Tom Carew) はじめ訓練を受けた青年たち、ブレン銃等500丁を投下。12月末のソーウー隊による日本兵3名殺害によって蜂起は開始した。⁽⁵²⁾

蜂起そのものは「勝利」したが、44年2月7日、ゲリラは武装解除された。抵

抗が、本州の抗日における連合軍との協力関係に悪影響を及ぼすことを危惧し、論議の結果不本意ながら彼らは解除に応じた。⁽⁵³⁾ アラカン抗日は当初、英國から軍事機密として口外を禁じられた。ティンペーミンは、ビルマ本州はじめ世界の人々に知らしめて反ファシズム連帯を訴えることを主張したが、今後の協力関係を思んばかり妥協した。45年初頭、撤退しながら激しく抵抗する日本軍に、今後どれだけ犠牲と時間を払えば勝利するのか予想がつかなかったからだとう。⁽⁵⁴⁾

結局アラカン蜂起がビルマ本州の抗日勢力と連合軍協力にむけて宣伝材料となるという判断が生じた45年2月3日、ティンペーミンは担架でカルカッタの放送局に運ばれ、枕にのせたマイクから、ビルマ本州もアラカンにならえと放送。それはデリーとコロンボの局を経由してビルマへ流れた。⁽⁵⁵⁾

アラカンでは武装解除に続く試練が訪れていた。再占領地の行政を担当するビルマ民政局（CAS (B)）が、統治開始と同時に反英主義者リストにもとづく逮捕を始め、その中には抗日参加者も含まれていたのである。ティンペーミンはシムラの警察長官プレスコットに抗議。カリューによる民政局長ピアス少将（Pearce）への働きかけで、ゲリラは全員釈放された。⁽⁵⁶⁾

蜂起は栄光のフィナーレでなく困苦の始まりだった。それは闘士たちを分断した。英國の申し出たコミッショニングを、ある者は拒否し、ある者は受け取った。引き続きアラカンで政治・組織活動せよというティンペーミンの指示に従わず、カルカッタに戻ってくる者もいた。ある者は蜂起の経験を一齊蜂起に生かしたが、ある者は墮落し、基地を追放された。⁽⁵⁷⁾ 蜂起後の方針が明確でなかったことによるこの混乱は、今後起こりうることへの重大な提起であるはずだった。しかし、一齊蜂起での協力関係への期待から、すべてに目がつぶられた。かつてPRPが日本の援助に幻想を抱いたように、武器援助への期待による妥協はくり返されたのであった。

5. ベハラの共同社会 1944. 12—1945. 3

アラカンへのパラシュート隊出発真近の1944年12月、ベハラ基地にはAFPFL派遣の本州グループが次々と到着していた。⁽⁵⁸⁾ その他、英國側の投入した無線技

師、翌年にはアラカン帰還組などで、基地は最大時80名を擁したという。⁽⁵⁹⁾ ビルマ人が共同苑と呼んだこの基地は、英國支配下の奇妙な解放区だった。そこでは、多数決で選出された指導部のもと、規律ある生活が営まれた。⁽⁶⁰⁾

本州グループから抗日進展状況をティンペーミンが直接聴取したのは、44年12月であった。BNA（ビルマ国民軍。43年9月BDAを改称）内の共産党細胞学習会、長老たちの援助、見て見ぬふりのバモー総統、農村でBNAや地主の協力で抗日講義するソウ、自宅や車を抗日に使用させる物資需給大臣タントゥン、自宅を談合の場に提供する外相ヌなど、AFPFLの縦横無尽の秘密活動は、ティンペーミンに「動けない身」のふがいなさを思い知らせた。⁽⁶¹⁾ 物質的に恵まれても一歩誤れば第五列となりかねない⁽⁶²⁾ ベハラ生活との比較で、彼はAFPFLの危険な秘密活動に魂の自由をも見たのではなかろうか。

当時英國側でも、BNAやAFPFLを警戒する総督やCAS（B）に対して、戦局を有利に展開するために抗日勢力を最大限利用しようとするインドの連合軍司令官マウントバッテンや136部隊との間で、応酬がくりかえされていた。しかし AFPFLと接触のあるのは136部隊だけであり、その抗日のうねりももはや押しとどめられなかった。⁽⁶³⁾

45年1月、136はAFPFLとの「協力」にふみ切った。ティンペーミンの抗議⁽⁶⁴⁾にもかかわらず、本州の協力地域は、今後日本軍との間にシュエボウ・ザガインで激戦があるという想定のもとに限定され、あわよくばアラカン同様の個別蜂起一武装解除が狙われた。136は何度かにわたってAFPFLと連絡をとりながら、夜間、タウンター、チャウセーなどビルマ中部に、闘士、技師、機材などを投下した。⁽⁶⁵⁾

45年2月第三週 マウントバッテンとティンペーミンの手紙がパラシュート隊と共にペグー西方へ降下。3月1日から3日の、ラングーンのウンサン宅におけるAFPFL最終幹部会で討議された。マウントバッテンの手紙は、抗日戦終了後すべての武器の返却、136隊員の指示に服従を条件に武器援助すると告げ、ティンペーミンの手紙は、アラカンの経験をかんがみて、連合の武器をあてにせず自力で決起せよと告げていた。討論の末、AFPFLは、武器は受け取るが136には従わず自分たちなりに全国一斉決起することを決定した。⁽⁶⁶⁾

3月18日、タウンジーのタントゥンのもとに、もう一通のテインペーミンの手紙が届けられた。それは、抗日勢力のラングーン占拠、臨時政府樹立、武器穩匿を指令していたが、タントゥンは時機尚早としてそれを無視。むしろそれに先立つテインペーミンの協調主義的論説「ファシストの奴隸から解放へ」を重視し、普及した。⁽⁶⁷⁾

3月20日からカリュー少佐を長とする136軍事ミッションがタウンジーへ降下。タントゥンの要請で、さらにチームが増派された。3月27日のAFPFLの一斉蜂起には、136チームも地元抗日部隊と共に戦闘に参加した。⁽⁶⁸⁾

この後、5月のラングーン「解放」、独立交渉へと展開するのであるが、連合軍との協力を推進する抗日勢力代表としてのテインペーミンの役割は、ひとまず一斉蜂起の時期をもって終了したといえよう。ある時は当局と対決し、またある時は多くの援助を引き出すために対決を回避し、当面の武装闘争の成否にのみ目を奪われ、権力奪取のプランを具体的に出せないまま、テインペーミンは一斉蜂起を迎えたのであった。アラカン同様の試練が訪れること予測したとしても、ものはや流れは押し留められなかった。

テインペーミンのインド時代はさらに半年近く続く。しかしそこには、ビルマ共産主義運動の流れや独立闘争の展開とのかかわりの中で考察すべき、あらたな課題が存在する。そこで再び目を文学に転じ、彼のインドにおける抗日のもたらした影響を考えてみよう。

第5章 誰も書かなかった抗日闘争

1. 『東より日出づるが如く』の時代設定の意味

『東より日出づるが如く』が抗日の勝利でなく萌芽で結ばれた理由の第一は、テインペーミン自身も述べるように、⁽¹⁾ 45年9月、帰国直近にカルカッタで読んだ『パリ陥落』(1942 エレンブルグ) の影響であった。『パリ陥落』がその反ファシズム思想のゆえに、独ソ不可侵条約締結時のモスクワで受けた微妙な扱いを、テインペーミンは知るよしもなかったろうが、困難のもとで貫かれた反ファシズムの情熱は、明らかに彼の心に共鳴した。日本の無条件降伏に続き、一年間彼を

病床に縛りつけた脊椎カリエス全快近しの報を受け、帰国の予感に高揚していた時でもあった。読了後彼は「大変気に入り、そのような類の小説を書きたい気持がふつふつと湧き起くるが、『そうか、共産党書記長になればこういった類の仕事から遠ざからねばならないのか』と恨事の念にかられた」⁽²⁾と述べている。45年8月、彼はBCP書記長に任命され、帰国後は激務が待っていた。

『東より日出するが如く』は、1935-45年を背景とする『パリ陥落』の、ファシスト侵略前夜の描述とレジスタンスの萌芽を示す結末にヒントを得た。しかしそれなりの強力な誘因がティンペーミンの側に存在していなければ、それはヒントとなることすらなかったであろう。

『東より日出するが如く』が抗日の萌芽で結ばれた第二の理由は、ティンペーミンがこの作品で抗日闘争そのもの以上にファシスト侵略プロセスの描述を重視したことによる。作品を構成する三つの部分の中で第二の部分-1300年闘争部分の描述が長いのは、闘争の挫折の経緯を執拗にたどり、左翼青年が日本の援助による独立という幻想に傾斜する必然性を詳述するためであった。すでに1938-42年という時代を『ビルマで何が起こったか』で記録的に描いていた彼は、『東より日出するが如く』でさらにそれを小説的に再現し、ファシストをビルマに引きこんだビルマ側の事情をあきらかにした。⁽³⁾

新たに第三の理由を付加するとすれば、「勝利」ではなく「萌芽」の中に、今後あるべき新しい闘争の方向の提示が試みられたことをあげるべきであろう。作品を構成する第三の部分で描かれる主人公の幻想の破綻と誤謬の克服は、ビルマのどの小説にも見られぬ角度からの抗日闘争描写であった。そこに描かれる42年7月までの抗日闘争の中には、42年7月以降の抗日におけるティンペーミンの苦い思いが練りこまれているのである。

2. 抗日の光と影

アラカン蜂起の成功、AFPFLと連合側の連絡などの「成果」によって、ティンペーミンのインド抗日時代は評価されることが多い。その活動は、BNAとアウンサンを、ファシストの援助を得たという汚点から解放する鍵であり、とりわけ論文「英國とビルマ人民のさらなる相互理解と協力に向けて」は、英國の平和

的復帰の鍵となったというテイラー、⁽⁴⁾ 国内の反ファシズム闘争を外国のそれと結合させたこの時期が、彼の生涯で最も輝いていたというタキン・チッマウン、⁽⁵⁾ アウンサンを国内の独立闘争の立役者とすればティンペーミンは国外の立役者であり、戦時中のビルマ人のよりどころこそ連合側との接点「共同苑」^{ボンイエイター}に他ならず、「共同苑」がティンペーミンの人生最高の成功だというニヨウミヤなど。⁽⁶⁾

インドにおける抗日についてティンペーミンは後年、三十人志士と比べ、陸路といつてもタイの非戦闘地域、あるいは船で日本へ脱出した彼らに比べ、戦地を突破してカルカッタへ来た同志の困難ははるかに大きい、⁽¹⁰⁾ ファシストと組んで英國を追い出したBIAの「革命」に比べ、連合側と組んだ抗日「革命」は、世界の進歩的潮流に呼応し、帝国主義戦争の枠を越えた人民戦争の一翼をになった⁽¹¹⁾ 等の評価を与えはする。

しかし彼はまた抗日統一戦線についてはおよそ次のように述べる。AFPFLの主力はアウンサンの軍隊であり、他に共産ゲリラ、私兵、英國側のゲリラなどで、広範な民衆を組織していない。学校の閉鎖で青年はかいらい青年組織を通して抗日に加わったが、産業の破壊で労働者の組織的参加はなく、農民の組織化は地上も地下も機能しなかった。つまり、労働者農民の組織的参画を欠く AFPFLは、統一戦線としてきわめて変則的な形態だったというのである。

その理由として彼は、核となるべき共産主義者が、少数者に抗日マルクス主義思想を講じるという理論偏重、精銳主義に陥り、連合軍との協力による武装闘争重視のあまり、ますます大衆オルグを軽視するという、武闘一偏倒に傾斜していたことを指摘。広範な大衆から遊離したことが、彼らをより空想的にしたと述べる。もちろんティンペーミン自身も、責任に連座していた。彼がそれを自覚していたことは、「病床で読書思考するティンペーはソウ以上に空想的」だったと述べるところからも明白である。⁽¹²⁾

さらに彼は、自分をも含めたマルクス主義者のこの時期の過ちは、抗日蜂起と同時に AFPFL中央臨時政府を設立して、地方でも AFPFLが権力を奪取しようとしなかったことだと考えるに至った。権力奪取の闘争は必ずしも流血をともなわない。それは、ユーゴや中国の政権樹立の例からあきらかだとも述べている。⁽¹³⁾

つまるところ、もしもマルクス主義者が大衆の中に浸透し、自國の大衆の力を信じて組織化に励んでいれば、外国の武器に依存した蜂起は第二義的となり、広範な統一戦線による独自の蜂起が可能であった。そこに武装解除を主張する協調主義が入りこむ余地もなかったというわけであろう。アラカンにおける蜂起の成功と革命の流産が、一斉蜂起でも再現された責任は、インド時代のティンペーミンに帰するところ少なくない。ゆえに当事者としての彼は、抗日の「栄光」を題材にして、小説の世界で読者を幻惑する無責任さをさすがに持ち合わせていなかつたといえよう。

3. 歴史と個人

ティンペーミンは『東より日出づるが如く』の結末近くで、ティンマウンダーに、タキンによるファシスト侵略の帮助は押し留められぬ流れだと語らせた。そして押し留められの流れの中の自然のなりゆきについて、ティントゥンにこう語らせる。

「ひとたび困難に直面すれば、気が弱り、卑屈になり、楽な道を選ぼうとするのは、多くの人間の常である。故に、自分にビンタをはる日本人の足までも抱こうとする者たちが現れる。ひれふし、愛さずとも枉げて接吻する行為こそが、賢人のなすべき定めなりという訓戒の類が現れる。これは自然のなりゆきであろう。その人々の態度は、自然なのだ。だからぼくは、彼らの全てを許し、非難を飲みこもうとしたのではないか。」⁽⁴⁾

不可抗力な事態の中での自然のなりゆきに対する主人公の寛容性もまた、ティンペーミンの抗日時代の產物であった。時代の運命の前に個人の力は微々たるものであり、小さな善意も良心も流れを押し留められなかった。42年7月から45年3月までのティンペーミンの抗日活動は、自己の意志よりむしろ大国の意志、あるいはその諜報機関の意志にあやつられた。国内の抗日が民衆多数と遊離していたと同様、諜報機関の庇護を受けた「共同社会」もまた、民衆とは遊離した非日常の中にはいった。

ティンペーミン自身が大戦中、流れに漂う木の葉にも似ていた。三十人志士が日本軍と「協力」せずとも、日本軍は遅かれ早かれビルマを侵略したであろうし、

関連地名図



テインペーミンが連合軍に「協力」せずとも、早晚連合軍はビルマを奪回したであろう。

押し留められぬなりゆきとして、マルクス青年たちは日本軍特務機関の「誘惑」を受けいれた。ティントゥンがマ・ミヤフミーと結ばれたのもまた、押し留められぬ流れの中であった。マ・ミヤフミーはティントゥンの政治活動の重要な局面に現われ、彼を網にかけた。日本軍の援助による独立闘争が幻想であったと同様、マ・ミヤフミーの出資による地下印刷所設立も、幻想であった。

たとえ目的が「正義」であっても手段を選ばぬ方法は自らの墓穴を掘る。信頼に値しない相手との同盟は避けるのが賢明であり、たとえ避けられぬにせよ甘さは禁物である。これが、作者から主人公に与えられた歴史的教訓であった。かくしてテインペーミンは、結末においてティントゥンに、マ・ミヤフミーのさしのべた救いの手を払いのけさせる。

「いかに危険であろうとも、この家にはもう潜んでいたくない。実際この家は日本の魔の手からかなり安全な所である。日本人とねんごろなマ・ミヤフミーは、ぼくを力の限り守ってくれるであろう。だがぼくはもうその保護を必要としない。マ・ミヤフミーの世界から離れたかった。日本ファシストや日本人事業家たちとの複雑な交際で成立する生活から遠ざかりたかった。」⁽¹⁵⁾

42年5月—7月のティントゥンは、たしかにビルマ国内に放たれた作者の分身ではある。しかし彼は、当時のテインペーミンのように連合側の援助に期待は寄せてはいない。彼の抗日の武器は第一に信頼できる人の輪、第二に日本兵から奪った銃である。テインペーミンはティントゥンの中に、不可抗力な流れの中で幻想を断ち切った自立的抗日の理想を注いだ。人間の作り出した巨悪にたちむかえるのも、人間をおいて他にないのであったから。

歴史の針を元に戻すことはできない。しかしテインペーミンは虚構の中でそれをやってのけた。彼はティントゥンを振り出しに立たせ、抗日のもうひとつの可能性を示すことで、無力な個人の無数の集合が切り開くべき歴史を確認したのであった。

おわりに

1942. 7 — 1945. 3 という期間、テインペーミンは一編の小説も書かず、またこの期間を背景とした小説をその後も書かなかった。ひとりの作家が小説にも書かず、小説をも書かなかつた時代、小説の空白と沈黙もまた、その主張のあらわれとみることができよう。

この期間について書かれたテインペーミンの回想録『戦時の旅人』は、彼の知る事実のすべてを語りつくさず、波間に漂う木の葉の如き自己を美化するきらいがなくもない。同書に、テイラーによる英訳版冒頭の長文解説を補ってようやく、我々は事実に接近することが可能となる。もちろんそれでもまだ多くの不透明な部分は残されたままである。

事実が虚構を圧倒する時代は、小説を書くことや小説に書くことが困難であるのみならず、ノンフィクションも客觀に欠けがちだという困難を包含するようである。テインペーミンの空白と沈黙は、歴史を題材とした安易な虚構の、現実に及ぼす危険な反作用への、ある種の警告として、現代的意義を持つと考えられる。

なお、この時代の背景について必要な資料のすべてが、必ずしも入手できたわけではなかったことを、おことわりしておきたい。

'93. 9. 30

(注)

第一章

- (1) ただし対日協力者による活動あり、42年9月日本軍宣伝班がトゥリヤ紙編集長ウー・ティンマウンを支援して作家協会結成。42年10月機関誌「作家」創刊。43年9月年次総会開催。44年5月「文学者の日」開催準備会発足。44年11月「文学者の日」開催。作家協会によるウィザヤ劇上演はじめ各種講演、討論会など。ただし44年頃から抗日を暗示する時代劇なども登場。
- (2) 抗日文学とビルマ社会主義についてはJ-8参照
- (3) ○印は文学賞受賞作品

- (4) E-4、B-23、B-24、B-29など
- (5) B-29 (P.501)。訳、解説はJ-19。なお1945年3月インド・人民文学社発行の英語版は、共産党のA.S.R.チャーリーが序文を書いたという。

第二章

- (1) J-9 (P.108) で12月入党をほのめかし、B-24 (P.28) で入党後、日英戦直前にティンペーミンはチョーニエインと本部で会ったと述べている。
- (2) B-14 P.227
- (3) ティンペーミンが説明され、理解した党の性格についてはB-24 P.27、J-9 P.106-107。彼が同党のことを熟知していなかったことは、彼がチョーニエインにシェーダゴンパゴダ北参道下の中華寺近くの邸宅へ連れていかれ、そこが本部であること、指導者がタキン・チッであることなどを初めて知ったとの叙述からうかがえる (B-29 P.458)。チッは潜伏中であった。
- (4) B-23 P.37-38
- (5) 入党動機はJ-9 (P.108)。なお彼は39年3月タキン党除名。40年中頃まで映画監督の後性病で入院、以後執筆に専念。
- (6) B-29 (P.458-459) によればPRPと同時期に結成された後42年8月タキン・ソウが再建するまで自然消滅していたビルマ共産党 (BCP) との人的交流も比較的自由で、BCP書記長だったアウンサンはPRP指導者に、バヘインは二党をかけもち、タントゥンは入党せずに二党的仕事を手伝い、獄中タキン間でも同様に交流があった。
- (7) B-8 (P.204-207) の作家シュエードン・ビーアウンの追悼文によれば、ティンペーミンは12月23、25日の日本軍の空襲の後彼の家に転居。会議がよく開かれ、名も知らぬ男たちが出入りしては、夜の町に散ってゆく日々が続いた。警察の車が家に到着した時ティンペーミンは駅に逃げ、ビーアウンが荷物を届けると、尾行刑事の前でティンペーミンは堂々と教育相メイティラ・ウー・バインと共に特別車に乗り込み出発したという。
- (8) B-29 (P.463-464)、B-8 (P.254)。その他先々の寺やクーメエに疎開中の作家ダゴン・ウー・フラベー宅を拠点にチャウセー、ミッター、ターズィー、メイティラ、ザガイン等をオルグに回ったという。

- (9) B-29(P.464) でマンダレーに来てまもなく王宮が炎上したと述べる。空襲による王宮への飛び火は2月18日。
- (10) 「組織」代表タインチッ・ティンペーによれば彼自身はラングーンでの官吏時代ティンペーミンと旧知であったが、ティンペーミンが「英國和平組織情宣部」に登録していたことが組織の不信を呼び、組織の一員か否か調べるためタキン・タンをターヤワディのウー・ティンのもとに送ったがオウポウで逮捕された。やがてマンダレーに来たタキン・ルインの証言で「登録」が通行を容易にするための方便であったことが判明 (B-15 P.9)。当時マンダレーでは他にタキン・キンマウン (タキン・レーマウンの弟 46年の時点で故人)、ティンシュエー (チャウセー出身。後にティンペーミンとインドに亡命)、タキン・ミヤ (ピンマナー出身。PRP本部指導者のミヤとは別人)、タキン・ターキン (モウゴウ出身) らが活動。タインチッ・ティンペーはタインチッ (愛國) 新聞主宰。彼の印刷所でミャンマー・アリン紙、アソウヤアーボー・ウー・バフニン発行のドダウンランパレイ誌と戦局ニュース等を印刷。なおティンペーミンは48年以前テッポンデー・ティンペーあるいはタキン・ティンペーを名乗ったが、タインチッ・ティンペーとの混同を避けるため本稿ではティンペーミンの名を使用している。
- (11) B-29(P.415) によるとラングーン医大生で軍事サークル鋼鉄隊のコウ・マウンマウンが軍事指導・講義。B-8 (P.130) のタキン・ルインの追悼文によれば、ティンペーミンはルインとマンダレーで一ヶ月間一緒に活動。タキン・サンフラボーに7日間夜を徹する講義をしたことあったという。
- (12) 教師キンマウンガレーの勤務校の校長の厚意で教師を装った (J-20 下巻 P.264-265)。英印軍通過鉄道切断工作班を指導。官憲に察知され、潜伏中の精米工場が包囲されたティンペーミンは台所で飯炊き男を装ってやりすごした。彼の班にいたのはタキン・タン、ムスリム脱走兵ポウ・ペーティン、英緬混血のオスカー、ビルマ人ボウ・ペー、サンフラボー、ティンフラなど (B-15 P.34-35)。
- (13) 他にモウゴウで待機したキンマウンガレーの名もあげられる (B-15 P.11、B-29 P.465)。チョーニエインはそのための資金1万チャットをティンペーミンに与え、紙幣はウー・バイン教育相の甥でメイティラのトゥンセインの協力で両替していた (B-24 P.30)。

- (14) チョーニエインはタキン・プラとラングーン・ミンガラドンのビルマ兵から武器を入手 (B-24 P.36)。武器の集まりはよく、地方にも分配。銃ライセンス所持者部隊も結成。だが脱走者を野盗にせず革命家に育てる活動は困難だったという (B-15 P.45-46)。
- (15) 篤志家はナガーニー葉巻工場主ウー・トゥンチュン、ドー・ウー夫妻、シュエボウ精米工場主トゥンペー、ミッターのチンセイン、メイティラのトゥンセインなど (B-15 P.12-13)。タキン・ルインによれば毛沢東文書は500部印刷されケードル用に配布。ダゴン・ウー・フラペーによれば抗日文書は、第一の敵英國はビルマから逃走したが第二の敵日本がコーカレイに来た (1月22日日本軍コーカレイ占領) という一節で始まる長文。筆名チーリン、ダガウンチュエッなどを使用 (B-8 P.136、P.254)。タインチッ・テインペーは、抗日は演説など口込みに留め、文書に残すべきでないと、またチョーニエインは性急で思慮に欠くと批判 (B-15 P.13-14 B-24 P.34)。
- (16) モウゴウには他にタキン・ターキンとチョーニエインが同行。チョーニエインは対外的に有名な指導者をかつぎ上げることやむなしと考えていた (B-24 P.32-33)。発砲寸前のマウンマウンレー、マウンガレー、バティンら若手を自由にさせて逮捕された場合組織の情報が売られると、タインチッ・テインペーは慰撫に努めた (B-15 P.35-36)。
- (17) 親中派のバチョウを訪れたのはチョーニエイン、ティンペーミン、タインチッ・ティンペー、ティンシュエー (B-15 P.36)。王將軍 (Wang P'eng-sheng 1893-1946) は国民党の日本専門家。情報部の長戴笠^{タイリー}と親密。37年以降ビルマ、タイ、ベトナム、シンガポールを友好使節として歴訪 (E-3 P.316)。蔣のアドバイザーかつ国際問題研究組織のチーフ。訪緬時バチョウ、ヌ、ソウを中国に同行しようと努力。日米開戦を二ヶ月前に予告 (B-25 P.192)。42年4月13日モウゴウ刑務所を脱走したバモーに国民党政府への協力を依頼する書簡、安全通行証、身元保護命令書を送った (J-1 P.259)。
- (18) 42年4月19日20日王將軍はマンダレー刑務所のヌ、ソウ、バヘインに面会。ヌは英が自治領化を認めるなら国民党政権に協力すると提案。王、ドーマンスミス総督 (Dorman-Smith,Sir Reginald)、アレクサンダー将軍 (Alexander) がチャー

チルに打電するも返事はなく、ソウが英の援助を重視する抗日計画書を書いて王に託した。22日王はヌ、ソウ、チョーセインを同行して重慶に向かう。バヘインは同行を拒否。メミヨで一行は日本軍のティボー占領を知り、通行不能のためマンダレー刑務所に戻された。コレラの発生で混乱していた刑務所当局を懐柔してヌ、ソウ、チョーセイン、ミヤトウイン他タキン多数脱出（B-25 P.15-19）。

- (19) B-25 P.17-18、B-29 P.468
- (20) B-25 P.16、P.19-20 なお中国侵略反対委員会とは4月20日前後王が設立したビルマ中国協会をさし、テインペーミンは委員に任じられていた（E-3 P.12）。またソウ、チョーセイン、ミヤトウインが獄中から旅装を整えていたのに対し外国行きを意図していなかったテインペーミンは軽装だった（B-25 P.21）。
- (21) B-25 P.20-28 一行はイエナンター村、ケエティン村に宿泊後バチョウ疎開先のセイケンチーバー村へ。タキン・ルンボーやタキン・フラマウンも同居していたが、一行はバチョウ以外に旅の目的を告げなかった。
- (22) B-25 P.28-33 一行は日本軍のスパイの嫌疑で拘束。同行のタンマウンはペン、指輪、時計等を没収される。夕方帰還した將軍孫立人^{ソンリーレン}は扱いを米人顧問マーティン大佐に任せ、同行は許可。
- (23) B-25 P.35-42 日本軍5月3日バモー、8日ミッチーナー占領。国民党軍はタンタビンーウントウーカンパルーからメエザへ行軍した。乾季の水不足で水をめぐってチョーセインと中国兵がけんか。食事は玄米と玉ねぎのスープで時には英軍の捨てた缶詰や村の家畜、手榴弾で捕る魚等。中国人は死人の穴を掘るシャベルを調理用しゃもじにも使ってテインペーミンを驚かせてもらっている。
- (24) B-25 P.42-54 デヨンデヨン村-ティーチャイ村-ダガウンを経てチャウミヤウンでヤンナイン配下の将校に会いシュエボウへ車で送ってもらう。なおテインペーミンが初めて日本兵を見たのはチャウミヤウン。下着姿に帽子をかぶり彼を手招きして銃身磨きを命じ、彼が断ると怒って殴りかかった（B-25 P.55）、シュエボウでは日本軍情報局のウー・フラーと談笑中日本人がチョーセインの所持する『泥足の巨人日本』（1936 フリーダ・アトリー）を没収しそうになった（B-25 P.56-57）などの体験に遭遇。
- (25) B-25 P.58

- (26) B-25 P.59-61 36年スト以来弟同様に親密だったヤンナインに会いにタンタビンに向う途中一泊した村で、その配下の元学生達と語ったティンペーミンは、彼らの抗日の意志を確認。ヤンナインと再会しイラワジ河で船中泊時も各舟の兵士と語っている。同隊の学生出身者はティンマウン（俳優）、チーマウン、ティンウー、タンワイン（戦後も軍人）など15名以上。同隊はバンコクで24名だったのがシュエーダウンの戦闘時1200名、死刑も含め不良分子排除の結果タンタビンで1000名。90%が若者でメリギー出身者が最も多く、5-6人ずつ分宿先の家人とも円滑。美食を求める牛馬の使用は謝礼をはずむので人気のヤンナイン隊を日本軍は警戒。同隊はバモーへ向かうところだった。
- (27) B-25 P.66-70 ヤンナインと別れマンダレーに入って彼は日本軍に手配されているのを知ってタンタビンへ戻る。バチョウに会いにシュエボウに行くが会えず、マンダレーのBIA本部で、日本軍への失望をもらす36年スト以来の友人で参謀のレッヤー（フラパー）中佐、誰も信じられず混乱状態のバヘインらに会っている。
- (28) タインチッ・ティンペーはティンペーミンと別れた後もマンダレーに留りマンダレーの「組織」の中心として新聞社を継続。日本軍幹部と交流もあったが5月20日逮捕。縛ったまま濡れタオルを鼻にかぶせ口から水を注いで腹を押さえ水を吐かせる、目にはうそくの滴をたらす、一晩中起立させるなどの拷問後10日後にメミヨに移送、2ヶ月間拘留。質問事項は「ビルマ独立革命組織は抗日を目的とするか」「抗日活動をしたか」「共産党員か」「タキン・バヘインに会ったか」というもの（B-15 P.71-148）。質問事項にはティンペーミンの行方を問うものはない。ティンペーミンと誤認逮捕との説もある。ただしティンペーミン自身は逮捕が誤認でなく抗日文書がタインチッ社で印刷されたことによると考えた（B-25 P.69）。殺されたザガインのティンダンはティンペーミンと一緒に活動していた（B-24 P.45）。
- (29) 当時タントゥンはネルーに心酔。ラジオでネルーが抗日のための英國との協力を説くのを聞いた、ネルーから抗日カンパをもらえと主張。同行者には病身のミヤトウイン、チョーセインでなくティンシュエーを推挙（B-25 P.72-73）。タントゥンがティンペーミンにインド行きを勧めたのは40年に続き二度目。なおティンペーミンはこの時のタントゥンが共産主義者でなかったというが、バモーはすでに42年6月タントゥンが新しい軍隊内に共産党秘密細胞を組織した上でアウンサンに非難

されたと述べる (J-1 P.230)。

- (30) B-25 P.74-75
- (31) B-25 P.75-105 メイティラーチャウパダウン－イエナンチャウン－アーラン－プローム－レッパダン－ヒンダダ－ダヌピュ－ガタインチャウン－ターバウンを経てアラカン州に入り、グワータンドウエー－ミエポンからミンビヤーへ。タキン・ティンミヤはPRP上ビルマ本部が会計監査の名目実はオルグのためマグエのBIAに派遣。大尉に任じられていた。道中観察されたのは、アーランで威張り散らすBIA将校 (P.82)、BIAの作った統治組織に規律があり、多くの人々とりわけバス運転手が巧言雑言とりませ日本語を話すレッパダン (P.84-85)、日本語クラスに入学者多数のダヌピュー (P.87)、タンドウエーの反人民的BIA将校 (P.101-102) など。
- (32) B-25 P.108 ヤンアンはスイットウエの銀行から200万チャット没収。100万をアラカン行政府に、30万を隊に、70万を本部に、ソウの要求で5万をBCPと抗日闘争に、ティンペーミンには1000チャット与えた。
- (33) B-25 P.110 ミンビヤーのボウ・ザン、ボウ・フラ、ブーディーダウンのサントゥンアウン、ラングーンのトゥンシュエーらがクミラに拘留。
- (34) B-25 P.109-124 ミョハウン－チャウト－バレッワーグ－ワを経て越境。
- (35) B-25 P.84 たとえば42年5月6月彼らの旅姿を目撃した知人は少なからずいたが、互いに声をかけずやりすごした。非常に時に、このように命じられずとも秩序を保つ機転は抗日に役立つ資質だとティンペーミンはみた。
- (36) B-25 P.26

第三章

- (1) J-20 下巻P.76
- (2) J-20 下巻P.126
- (3) J-20 下巻P.173
- (4) J-20 下巻P.173
- (5) J-20 下巻P.230
- (6) J-20 下巻P.264
- (7) J-20 下巻P.293
- (8) J-20 下巻P.312

(9) J-20 下巻P.319

(10) 42年7月27日BIA解散。31日3万人のBIA兵士中2800人をBDAに再編。

(11) J-20 下巻P.336

第四章

(1) B-25 P.129-152 印緬両国境の住民カムエ族の助けで筏を組みサング川を下る途中警官に止められ聴取を受けた後逮捕。二人はインド警官にボース派が多いことを考慮して偽名で通す。パンダリバンからドハザリに送られ英人少佐に会って初めて本名と事情を明かす。この少佐は好意的だったが次に送られたチッタゴンの師団司令部の取調べの少佐は身分証明書も信任状もない二人を信用せず、クミラでインド東部軍司令官と面会してやや待遇は改善。越境一週間後バラックポールでデニー少佐 (Denny)、元タボイ県知事ファン (Fann) の憎悪に満ちた聴取を受け、デリーでは警視庁捜査局副局長キッド (Kidd)、ビルマ警視総監付ジャップ (Jupp) に聴取された。

(2) B-25 P.153

(3) E-3 P.13 テインペーミンの報告の内容はほぼ『ビルマで何が起ったか』と同じと思われる。ただ報告ではBIAが反乱準備中で内部に共産党細胞まである述べられるが、『ビルマで何が起ったか』は、そこまで言及しない。テインペーミンの報告は戦争の初期においては英当局に多く利用されたといわれる。

(4) B-25 P.146-149 バラックポールでテインペーミンの監視をつとめた英兵3名中2名が英共産党員とそのシンパで、彼らの協力でテインペーミンは2度カルカッタのCPIを訪問。1度目は誰にも会えず2度目はカルカッタ留学時代の友人と再会。8ヶ月の非合法時代を経て7月23日合法化されたCPIの、ベンガル州指導者は1人もカルカッタに戻っていなかったため、テインペーミンは自分達二人の釈放を英当局に、訪中を中国領事館に働きかけることを依頼するムザッファル・アフマド (Muzaffar Ahmad) あての手紙を友人に託す。ムザッファルは、ベンガル州の党創設者の一人で、1939年にテインペーミンは彼にビルマ共産党設立援助を要請したことがあった。

(5) B-25 P.159-160 デリー到着後も彼はムザッファルならびに丁度当時デリーに来ていたビルマ生れのベンガル共産党員ゴシャールとの面会を申し入れるが果たせな

かった。当時CPIは「英当局の理解のもとに」抗日秘密活動を計画中でゴシャールはBCP代表として活動していた。136部隊（後述）のチーフ・マッケンジー（Colin Mackenzie）はゴシャールとCPI中央委スンダライヤー（P. Sundarayya）にティンペーミンの面会希望を伝えるが、ゴシャールがティンペーミンを信用できない人物として拒否したという。

- (6) ティンペーミンとティンシュエーもCPI・英國秘密協力キャンペーンに参加を希望したが、シムラの意志で不可能になった（E-3 P.14）。『ビルマで何が起こったか』の出版もシムラの意を汲んだ英当局が躊躇。43年4月、プロパガンダの効果が肯定されてシムラが出版許可（E-3 P.76）。
- (7) B-25 P.161
- (8) この件による総督の憤りは戦後独立交渉まで尾を引いたという（B-25 P.178）。
- (9) B-25 P.163-171 警察官僚プレスコット（Prescott）、文部官僚キャンベル（Cambell）、牧師アップルトン（Appleton）、教授ビーズリー（Beasley）等英国人、ウー・ティントウッ、ウー・チョーミン、サー・ポートゥン、サー・トゥンアウンヂョー、ドー・ミャセインらが在住。総督はビルマ再建秘密計画をビルマ石油会社（BOC）、ボンベイビルマ商事会社（BBTC）など植民地資本家と練り、半官半民のプロジェクトボードによる新手の搾取を協議。ティンペーミンはさらに、淡い恋心を抱いたパンジャブ娘の存在にふれ、彼女に会わなければシムラの日々は憎悪しか残らないとすら述べる（B-25 P.176）。
- (10) E-3 P.15 FEBはシンガポール陥落後デリーで再建。対ビルマプロパガンダを準備。42年6月17日抗日プロパガンダを指揮する英國政府の政治戦委（PW[J]C）がその計画を承認。FEBは英復帰前のビルマ人との協力を強調し、モノ不足のビルマではラジオ放送よりパンフやデマ宣伝が有効と考えた。
- (11) B-25 P.177 それまでの食以外の生活費は二人の持参金でまかなわれた。「自由」の身となった二人は英情報省デリー支局勤務のオーストラリア人モ里斯（J.K.Morris）と同居。家賃食費はFEB持ちで、活動に参加すれば一日25チャット（当時ルピーとチャットは等価）支給。
- (12) インドからのビルマ語放送は42年6月から1日2回30分と60分。43年10月BBCがロンドンから1日2回15分のビルマ語放送を開始するとFEBの放送は1日2回15分と

45分になる（E-3 P.77）。パンフは戦況ニュース1枚、グラフィックイラスト・スローガン入り色刷りの「風神」1枚の2枚セット（E-3 P.15）。散布は英米空軍が担当（E-3 P.77）。

- (13) B-25 P.158 彼はシムラ訪問以前に軟禁中のホテルを出でルーを訪問。ルーはビルマで王と活動中テインペーミンのことを聞き及んでいたので早速働きかけを開始。
- (14) E-3 P.15-16、P.19、P.78参照のこと。
- (15) E-3 P.19 国民党軍内「軍調査統計局」(MBIS) チーフ、10万のスパイを動かす戴笠は41年香港で英国に逮捕され英國を恨んでいた。136は雲南経由でシャン州に入る協力を後に得るが制限付きであった。マッケンジーは、二人の中国での反英宣伝・放送を怖れる総督に、放送など許されないし王には二人に抗日教育を施す目的しかないと説得。12月5日申し入れ、26日許可。2人の出発後中国は無線技師2名をインドに派遣。英國の「誠意」に応えた。
- (16) E-3 P.18-19 136部隊は現地人のみを採用。ゲリラ闘争、サボタージュ、スパイ、デマ宣伝などの背後活動専門謀略機関。英國の敵を共通の敵とする限り思想を問わず採用。ヨーロッパのファシスト支配地域で破壊活動など指導した内閣直結の特殊作戦局(SOE)の東南アジア設置にともないSOE所属。ピーク時の1944年中頃SOE13000名中136は6000名。当時インドには英國側ではSOEとよく似た目的の軍務間連絡局(ISLD)、Z機関(GSO(Z))、沿岸で活動する小工作グループなど政治戦セクションのプランチ多数。米側は136より小機能の戦略情報事務局(OSS)、ISLDが戦時情報局の下に存在。136とOSSの競合、不信もあった。ただ136がいかにして作られメンバーがどう集められたか不明という。テインペーミンも多くを語らない。
- (17) E-3 P.19-20
- (18) B-25 P.207
- (19) 二人は米国帰りの知識人マー夫妻宅に住み通訳兼ガイドのチャン・リン・チンが同行。北京大学生で日本軍から逃れ王のもとに奉職したチャンはテインペーミンらに親戚・友人の男女学生を紹介。彼らは国民党に失望。その1人女子学生との間に友愛的交際も生じた（B-259 P.196-202）。テインペーミンは重慶到着数カ月後に、

中国政府を観察した結果英帝がさほど悪くないと思えるに至ったとグラスに発信（E－3 P.20）。

- (20) B－25 P.203 Pro-United Nations Section of Dohbama Asiayone この名は1941年のソウ、チョーセイン、タントゥンらの抗日計画ミンザン文書で使用された名と同じもの。なおE－3 P.20では、ティンペーミンはエプスタインの協力でデイリーワーカーに「マンダレーにおける我等ビルマ親連合セクトの結成」なる論文を発表し、北ビルマのチンディット隊将校その他情報関係者に重宝されたという。
- (21) B－25 P.203-206 王は「独立」を「自治」に、抗日勢力として「共産党、民主主義者、民族主義者、知識人」を「民主主義者、民族主義者、共産党、知識人、親英派」の順に訂正、文末には「抗日の拠点重慶に滞在する栄誉、蔣介石への敬意」と加筆することを要求し、ティンペーミンは鼻白んだが蔣の気がすめばという思いと多少の期待でそれに応じた。
- (22) B－25 P.222 ウィングート将軍（Wingate）は英・中・印・ビルマ・チン・カチンの混合部隊を結成しビルマ北部から入国、住民との協力で抗日を計画。1943年2月北ビルマに3000名侵入。調査、工作の後2ヶ月ほどで撤退。空から補給を受けた彼の長距離突撃部隊は別名チンディット隊。44年3月24日ウィングートは飛行機事故死するが部隊はその後も作戦に参加。
- (23) B－25 P.208
- (24) B－25 P.215
- (25) ^{タリヒ}戴笠強制収容所勤務のビルマ系中国人から聞く実態、抗日集会の水増し報道、見せかけの闇市撲滅キャンペーン、贈収賄と物資不正入手の蔓延、根本的改革にほど遠い蔣夫人宋美齡の新生活運動、家主の待遇のひどさ（B－25 P.209-212）、反共で手を組む国民党と南京政府、形ばかりの重慶空襲など（B－25 P.232-233）が挙げられる。
- (26) B－25 P.194-195 ティンペーミンは重慶到着後すぐインターナショナルプレスホテルのエプスタインを訪れ翌日陳を訪問。陳も又国民党本部の知人を通して彼の到着を知っていた。戦後も外務省アジア局長となった陳との交際は継続。
- (27) B－25 P.196 ジョシーの「帝国主義戦争から内戦へ」と共に中国語訳され中共

党内資料として発行されたという。

- (28) B-25 P.227-229 なおE-3 (P.20) によればこの学習の成果は「抗日ゲリラ戦の一般的諸問題」という文書にまとめられ、ビルマに持ちこまれてビルマ愛国軍(PBF 45年4月BNAから改称)将校用に配布。その内容はJ-11 P.162に少しふれられる。
- (29) B-25 P.229-230
- (30) B-25 P.234-240 ラングーン華僑会会长リーブンティン、バセインの富豪コープンティン、コープンカイン、中緬友好協会書記長ウイリアム・サインらと親交、ブンカイン宅に住む。孫文夫人宋慶齡は、エプスタインとは中国福利委員会議長と執行委員の間柄で親しく、43年の会見は英語で、52年テインペーミンの訪中時は通訳がついた。いずれの訪問も未亡人は10才若くみえたという。
- (31) B-25 P.241 報告完成後周恩来に見せ、誤りなしとの解答を得たもの。さらに帰印にあたって周は、ビルマの独立は中国インドの完全独立・民主主義にかかっているが独自の努力は必要というメッセージを寄せた。
- (32) B-25 P.243-244
- (33) この時期について書かれたものの中で国民党への評価は現在のところ見い出せない。
- (34) B-25 P.248-250 なおB-23 P.45に認められた時期が11月と述べられる。
- (35) E-3 P.20-21 136部隊と共にチンディット隊や OSS の101部隊の活動で43年中頃に北部ビルマでは情報網ができていたが、ビルマ中心部の情報は未入手であった。
- (36) B-25 P.251-258 彼が目にしたかつてのリストは彼を反英No.1、激しい愛国者・買収不可能と評価。
- (37) 日本軍のえじきとなる女性、物不足とりわけ布不足でボロしかまとえぬ民衆、BCPとPRPの競合、汗の兵隊の創設などが語られ、新聞、戯曲「綱の切れた雄牛」(タキン・ヌ作) ノンフィクション「タキンの独立への闘い」(タキン・バセイン作) 「私の冒険」(タキン・トゥンオウ作)などの書物、そして靴の中に隠されたタキン・ソウの手紙などが持ち帰られる (B-25 P.269-286)。ニヨウトゥンはラングーンのヌ宅に滞在。ヌは、ティンシュエーとタントゥンの来訪で初めて抗日運動の流れを知った (E-3 P.22)。
- (38) E-3 P.22 英国はビルマ本州の情報をそれまで北部国境の日本のラジオ放送か

らのみ入手。さらにティンシュエーがウンサン、ソウ、タントゥンと会ったことが戦線結成を促し、ウンサンは戦前のBCPメンバーを招集。ソウの指導で何回か秘密会議開催。

- (39) B-25 P.286、P.293、B-29 P.479-494 「かそけきバモー」は英文 ‘Dr. Bamaw nearly but not quite’。ニューデリーで発行の英字誌に載ったが紙名は記憶されていない。当時の民衆のバモーへの呼称をそのまま使用。またラジオドラマは2-3本書いたといい、東京会談はその一本。
- (40) B-25 P.292-294 また彼はベンガルのクミラ刑務所のタキンの釈放・抗日への合流を要求し続けたがシムラは返事を引き伸ばし、囚人の1人トゥンシュエーは病死。E-3 P.16-17 によればFEBのウィント (Guy Wint) も44年2月シムラを訪れ、ビルマナショナルコミティー結成を提言するが、インド在住ビルマ人は英・シムラに経済的に依存した者ばかりであるという理由で拒否された。
- (41) 訪問地としてはカンブルカレッジ、ラクナウ大があげられる。詳細はB-25 P.258-267。デリーのCPIではファルキー (Farooqui 学生指導者) グプタ (Gupta)、シャルマ (K. Sharma 農民指導者) らと、ポンペイでは、A.S.R. チャーリー (前出、弁護士・ジャーナリスト)、ラーナディーヴ (政治局員)、クマーラマンガラム (Mohan Kumaramangalam 人民戦争編集長)、ラーフル・サーンクリットヤーヤン (Rahul Sankrityayan 仏教学者)、ダンゲ (党創設の父)、カルパナ (Kalpana ジョシーの妻) らと親交、ジョシーの激務を観察 (B-25 P.268-269)。この他ポンペイで印刷出版映画事業の視察 (B-25 P.296-299)。なお女性観についてはJ-6 参照のこと。
- (42) B-25 P.295 ベンガルでは飢餓で300万が死亡。中国河南の中共による飢餓克服について報告。ビルマについては1. 農民、2. 労働者、3. 共産党、4. 民族資本家他、5.まとめ等項目別に1日ずつ執筆。
- (43) 別名ブラウダー主義。ティンペーミンの解釈によれば、20年代後半米共産党書記長アール・ブラウダー (Earl Browder) が唱え、第一次大戦で被害をこうむらなかつた米帝が労働者に富を分配して新社会主義をもたらすという米例外経済主義。30年恐慌で破綻するも、第二次大戦中の反ファシズム国際協力の中で復活。テヘラン宣言は世界史を変革するものであり、米は圧倒的経済力で戦後復興、植民地独立を援

助するととらえる（B-23 P.51-60）。当時これと無縁であったのは中・ソ・仏共産党で、その他の党は多少なりとも影響を受けたという（B-25 P.298）。インド共産党内ではブラウダーの著作が普及されたというが（B-23 P.52）、インド以外の共産党がブラウダーの著作の直接影響下にあったかは疑問である。しかし、英米諜報機関の競合、共産主義者と英國の協力下のインドでブラウダー主義がどのように導入されたのかは興味深い。なおブラウダーの著作はE-1。

- (44) B-25 P.298-299
- (45) ベハラキャンプの主な目的は44年12月の連合軍反攻に呼応したアラカン抗日の準備（E-3 P.27）。ベハラへ移動の時期はさだかではない。彼らはまずカルカッタの諜報者養成SEI校に滞在。ニヨウトゥン（偽名フラアウン）と再会。国境から連れてこられた5名に政治教育。2名が伝令としてアラカンへ。次にベハラへ移動。もう一人のアラカン青年トゥンアウンチョー（偽名アウンミン）はラングーンへ往復（B-25 P.299-301）。また、ニヨウトゥンは44年6月ポウフラ、トゥンセインらとアラカンに降下するがこの2名を日本軍に逮捕され、かわりにサンターチョー、セインアウンらをインドに連れ帰る。やがてティンペーミンからアラカン防衛組織へ136部隊の武器提供の知らせと軍事訓練メンバー派遣の要請（B-17 P.139）。さらに、ビルマ本州の青年をインドに送れというティンペーミンの手紙をニヨウトゥンがアラカンに運び、それは44年8月アラカン民族会議ター・ポウアウンによってラングーンのバヘインに届けられた（B-1 バヘインの序）。なお抗日統一戦線A FPFLは44年8月4日-6日ペグーのビルマ国軍教導隊でBNA、BCP、PRPによって正式発足。議長アウンサン、書記長政治担当委タントゥン、ソウ。タントゥンは後に対外連絡担当。後に加盟組織増加。
- (46) 44年以後腰痛。様々な治療を試みて完治せずベハラ移動後精密検査で病名判明。病院は目立つというのでカルカッタ療養院で10日間軍医ミトラ大佐（Mitra）、カルカッタ医大外科教授チャンドラ（Chandra）、延安に派遣された医療使節団の一員で重慶で面識のあるバスー（Basu）医師らの診察後ベハラに戻された（B-25 P.194、P.299、P.303-305、P.310-311）。彼はベハラキャンプ（サンディヴィラ）二階の一室にベッド、ラジオ、電話を置き、会議、講義、応接した（B-25 P.312）。
- (47) B-25 P.306-309 なお詳細な内容はE-3 P.23-27参照。ティラーはこの論文

がAFPFLとBNAが1945年英國と交渉するベースとなって英國の平和的復帰の鍵となつたと評価。

- (48) アラカンではティンペーの指示を持ち帰ったサンターチョー、サンアウンに、ボウ・ターチョー、トゥンアウンザンが同行してカルカッタへ。次にボンパウ・ターチョー、トゥンアウンチョー、フラチョーがカルカッタへ出発。12月初旬ウー・チードウが AFPFLに機が熟したので決起すると報告 (B-17 P.137-140)。アラカングループはその他タートゥンアウン、比丘ビンニヤーティハ、チャーフラアウン、ティティアウン、マウンガレー (B-17 P.50)。その他デリーで「風神」に記事を書いていた英情報省勤務のバソー、ワインゲート隊の捕虜となっていたチーことバティンらがスカウトされる。バティンの到着は44年10月1日 (B-25 P.312-314)。
- (49) 降下したのはチー。英当局に秘密の報告をマイクロフィルムにして服に縫い込んだ他、フランス独立闘争、ユーゴとソ連のバルチザン関係の書、「Burma will rise again」などの書物持参。到着後荷物を隠し難なくラングーンへ。BDAの制服姿で日本語が達者なので日本軍に疑われなかつた。フィルムはラングーン病院のマイクロスコープでバタン博士が解読 (B-25 P.316-317)。彼の到着一ヶ月後無線技師と機材ペガーの同地点に投下 (B-17 P.48)。
- (50) B-25 P.317-319
- (51) 連絡将校カリューは慎重に選ばれたためか勇敢で政治性人間性共に良好との印象を与えた (B-25 P.320)。彼は25才の熱烈なアイルランド民族主義者でナチ占領下のフランスが初の活動地 (E-3 P.27)。
- (52) 戦闘の詳細はB-17 P.137-148。
- (53) アラカンゲリラ1500名の武装解除を要求したのは再占領地行政担当東南アジア軍司令部のビルマ民政局 (CAS[B])。アラカン愛国戦線を反英急進派、山賊、殺人者の集まりとみて武器引き渡し後も隠匿を疑う。また第14軍司令官スリム中将 (Slim) は136のアラカン反乱への協力そのものに不満で、136部隊は情報提供という本来の任務を怠っていると考え、将来のビルマ再建への136の影響力を怖れた (E-3 P.28-29)。
- (54) 日本軍がまだまだ持ちこたえるという予測 (B-25 P.320、338) が彼の矛先を鈍らせた。その予測は連合側も同様と彼は考えたが、はたしてその通りなのか。むし

ろ連合側がそのような予測を意識的に流して「協力」を利用していたとは考えられまい。

- (55) B-25 P.342-343 英国は英人将校の指導で蜂起が成功したかのように吹聴。ティンペーミンが抗議して、改めた（B-25 P.335）。その後も大々的報道なくバトゥー少佐のシャン蜂起（3月8日）も伏せられた。ティンペーミンはCPIのラム（R.Ram Bose）を介して「人民戦争」誌、英ディリーウーカー紙にアラカン蜂起を紹介、シャン蜂起についてAPI支局、ステイツマン、アムリッタバザールパトリカ紙に記事を送り、136に事後報告。136は手を回して公表を防いだが2週間後報道（B-25 P.361-362）。
- (56) B-25 P.344 J-11 P.165
- (57) B-25 P.344-345 コミッショナを受けたボウ・ターチョー、抗日勇士でありながら政治性なく飲酒と規律違反で追われたアウンディンなど。
- (58) AFPFLは4回に分け派遣（B-1 バヘインの序）。B-1は44年9月18日のラングーン出発、ミッチーナのOSS基地経由12月9日ベハラ着、45年3月30日のピュー降下までを克明に記録。なおB-31は、B-1と同一作者で、B-1の一部を1940-60年の回想に挿入している。B-1、B-17 P.48-49、B-25 P.330-332を総合すると派遣された者は次のとおり、1タキン・ボウ（偽名ピュー、第一次団長、45年4月2日飛行機事故死）、2マンウインマウン（第一次副団長、カレン族指導者）、3ボウ・トゥーことアウントゥンことソウマウン（第一次、ミンチャヤン出身、BCP、戦後地下潜行チッカウンを名乗る、死亡）、4ミヤことオンマウン（第一次、ピヤーポン出身、BCP）、5チョーイン（第一次、後に大学教授）、6ソーハン（第一次、タキン・ボウと共に死亡）、7タン（第一次）、8タキン・ミヤトウイン（第二次、前出）、9バティン（第二次、前出、BIA少佐、愛称アター、タキン・ボウと共に死亡）、10フラクン（第二次、後にチエーモン紙編集長）、11ニエンウェー（第二次、後に交易公社勤務）、12キンゾー（第二次、後に国軍少佐）、13ティンマウン（第二次、後に物品税務局勤務）、14ソウマウン（第二次、後に地下潜行ボウ・ソウマウンを名乗る）、15バタウン（後にMEIC勤務）、16トゥンニュン（カマーユッで日本人を殺害した軍曹、後にカチン州議員）、17コウコウザー（バモー出身、後にマンダレーRTB勤務）、18イエトゥン（後にシャン州運輸公社勤務）、19ペーチー、20キンマウ

ンダー（モンユワ出身、後に労働者評議会委員）、21ティンマウン（後に地下潜行ペータウンを名乗る）、22テー（モンユワ・ザガインオルグ責任者、後にBCP指導者、肅正）、23サンニュン（後に地下潜行、死亡）、24ソーウー（タキン・ボウと共に死亡）、25エーチョー（後に獄死）、26パーレー（後に国軍将校）、27サンティン（後に作家シャンピー・サンティン）、28チーことバティン、29ポンミン、30フラタウン（後にBSPP本部勤務）、31ソーハン、32ティンザン、33バガレー、34ルウン、35バマウン等。

- (59) 英国側からはチン族のロバート・ソンカー、ビルマ族のティンニュンら（B-25 P.337-338）。アラカンからはさらに無学の農民20名来訪。教育に苦労。とりわけアラカン人の飲酒癖はトラブルの種だった（B-25 P.327-329）。
- (60) B-1 P.30-38に詳述。運営の指導部はティンペーミン、ミヤトウイン、ゴシャール、チョーイン、アウンミン、マ・ミャイー。うちティンペーミンが管理、指導、政治教育、ゴシャールが書記長、政治教育、ミヤトウインが会計、図書、政治指導。午後と夜は講義と討論。外出日は火曜でティンペーミンが各自に20チャットのこづかいを与えた。衣食住はビルマ国内より高水準。図書室には共産主義の書籍、ステイツマン、ヒンドゥスタンスタンダード紙、人民戦争誌が置かれ、バティンが貸出し係、ティンペーミンが読書アドバイザーをつとめた。手書きジャーナルが発行され、ティンペーミンが編集、批評。ティンペーミンの講義はわかりやすく、病床での活動は驚異的で不平をもらさず忍耐強かったという。講師は他にゴシャール、ミヤトウイン、サンニュンで、世界情勢、政治史、唯物論、社会主義、ビルマ政治史、CPIについて講義。毎日一人議長を選出し講座を運営。週一回共同体会議でゴシャールが総括と方針を提案、討議された。なおB-25 P.325によると、ゴシャールはCPIベンガル委から派遣されたと言って「共同体」に出入りを始めた。同じくビルマ生まれのベンガルの党員アフメディ（Ahmedei）は、ゴシャール派遣の決定はない、秘密をもらさぬようにと忠告。ティンペーミンはゴシャールをCPIとの連絡係に使えると考え改めて派遣を要請。インド嫌いの傾向の多少なりともあるビルマ青年と官僚的なゴシャールはよくぶつかったという。
- (61) B-25 P.334
- (62) ベハラでの教育の分担は活動の一部であり、英当局は素質のある者を引きぬきコロ

ンボで反ファシズム第五列の教育を受けさせた。派遣されたのはニヨウトゥン、タキン・ボウ、マンワインマウン、バソー、バティン、セインティン（オンミン）ら（B-25 P.341）。

(63) E-3 P.28-29 B-25 P.340

(64) B-25 P.346-349

(65) タウンターでは43年から抗日地下組織が存在し、44年中頃タキン・バヘインがランゲーンから来て活動。45年1月同地出身のパニュン、技師アウンと、チョーが機材と共に降下したのをはじめ何度かにわたって夜間、人と物質が降下（B-17 P.30 5-306）。この時ティンペーミンの論文「日本ファシストせん滅」が持ち帰られた（E-3 P.30）。統一戦線渉外係のタントゥンの物資の要求は過大で136のバタスビー少佐をして飛行機2500機分と言わしめた。この時ティンペーミンは、ビルマ側の英国への過大な期待や、英國が要求通りに決して応じない理由を深く考えなかつた（B-25 P.340）。また45年初頃ティンシュエーが中国無線技師とバモー出身のコウナーを伴い機材と共にシャン丘陵に隣接したチャウセー県内に降下、バトゥー少佐と合流。英國はわざと落下地点をそらせたが、地元の人間であるティンシュエーは巧みに対処（B-25 P.340-341）。ティンシュエーは一時活動に専念する心境になかったが復帰（B-25 P.321-323）。ただしティンシュエーとバトゥー少佐の活動の詳細は伝わらなかった（B-25 P.343）。なおティンシュエーは戦後まもなく地下潜行中に死亡（B-31 P.125）。

(66) B-17 P.64-67、手紙を運んだのはサンターチョーとタートゥンアウン。

(67) 45年2月のジョシーのベハラ基地訪問に先立ち‘From Fascism to Free’の題で執筆。蜂起後英國が復帰すると同時に、少数民族に至るまで各種大衆組織を結成し、一大大衆運動を展開して平和的に独立を要求することを指示。権力奪取法には武装解除の是非も含めてふれていない。ジョシーはそれを図式的に批判したのみで、翻訳後ジョシーの批判を添付しタントゥンのもとへ送られた。3月の一斉蜂起後BCPは無批判で各地へ配布（B-25 P.357-359）。いまひとつの手紙はティンペーミンの信頼厚いボウ・トゥーが運ぶ。46年1月BCP内でブラウダー主義導入の責任を追及するソウに対し、ティンペーミンとボウ・トゥーが手紙の処置をタントゥンに問い合わせ正した結果無視され紛失したことが判明（B-25 P.368）。

(68) ナチ占領下のフランスで使った英将校2名と無線技師1名からなるジェドバラ隊を投入。ジェドバラとは「襲撃者」を意味する暗号名。ただしビルマでは英人1名あるいは全員ビルマ人。タウンターに降下したカリューは3月23日、AFPFLとBNAは戦略にかかわりなく8日以内に決起するとインドへ打電（E-3 P.29-30）。3月24日ティンことマンウインマウン、ミヤことオンマウンがタントゥン指定地点に降下。マンウインマウン骨折。4月4日さらに6ヶ所にゲリラ基地建設（B-25 P.369-371）。一方アントゥンはパリトゥン大尉、ワーラー大尉、バーレー軍曹、タンとの5名チーム通称レインディアーとして3月20日、28日降下を試みるが失敗。30日降下に成功しタントゥンの基地に合流（B-1 P.48-69）。E-3 P.35では4月27日300名の AFPFL ゲリラがジェドバラの指揮下タウンター近くで活動。スイッタン峡谷では別のチームが日本軍の通信を攪乱し英軍のガイドを勤め、イラワジ渓谷ではジェドバラ2隊が AFPFL 1000名の支援で活動。4月30日デルタで500名のゲリラが136と協力し日本軍を攻撃したなどと述べられる。

第5章

- (1) B-26 P.53-54
- (2) B-25 P.394
- (3) E-2 参照のこと
- (4) E-3 P.27、P.68
- (5) B-8 P.120
- (6) B-8 P.41-42 ニョウミヤは病床のティンペーミンの革命的樂觀性に言及（B-8 P.41-42）。なお彼はアメリカからビルマに帰途カルカッタの米広報局で一時働いており、ティンペーミンとの面会許可を得るのが簡単でなかったという（B-25 P.380-381）。また共同体住人だったフランクンは、恵まれた共同体生活に有頂點になってビルマの同志の苦労を忘れぬよう説き、常に執筆し穏やかに話し、会議では名議長であったティンペーミンを（B-8 P.98-102）、44年バモー経由でインド入りしたチョーフラはティンペーミンの身の回りの世話を担当、睡眠をあまりとらず常に読書し、文学の方法論を講じたティンペーミンの姿を語る（B-8 P.90-92）。
- (10) B-25 P.335-336
- (11) B-23 P.46

- (12) E - 4 P.10-11 彼はさらに、そのような状況下で抗日が成功したのは驚異的。日本軍は連合軍よりもゲリラから打撃を受けたと樂観的に述べる。日本軍内部の矛盾や自壊については分析なし。
- (13) B - 23 P.62
- (14) J - 20 下巻 P.312-313
- (15) J - 20 下巻 P.346-347

文献

- E - 1 Earl Browder "TEHERAN Our Path in War and Peace" 1944. New York
- E - 2 Midori Minamida 'Anti Fascist Writings by Thein Pe Myint' "BURMA AND JAPAN" 1988. Tokyo
- E - 3 Robert H.Taylor "Marxism and Resistance in Burma 1942-1945 Thein Pe Myint's Wartime Traveller" 1984. Ohio
- E - 4 Thein Pe Myint "Critique of Communist Movement in Burma" Rangoon, mimeo, nd.
- J - 1 パー・モウ 横堀洋一訳 『ビルマの夜明け』 太陽出版 1973
- J - 2 W.S.チャーチル 佐藤幸一訳 『第二次世界大戦』 河出書房新社 1984
- J - 3 キン スゥエ ウー 田辺寿夫訳 『わが祖国』 井村文化事業社 1982
- J - 4 ジャーネージョーママレー 原田正春訳 『血の絆』 每日新聞社 1978
- J - 5 マウン・ティン 河東田静雄訳 『農民ガバ』 大同生命国際文化基金 1992
- J - 6 南田みどり 「ティン・ペー・ミンの小説における女性像のゆくえ」 『大阪外国語大学学報』 第47号 1980
- J - 7 南田みどり 「二つの大戦前夜－『東より陽出するが如く』への『パリ陥落』の影響について」 『第二次世界大戦とアジア社会の変容』 大阪外国语大学アジア研究会 1986
- J - 8 南田みどり 「暗黒時代の果実—ビルマ反ファシズム長編小説のゆくえ」 『世界文学』 No.72 世界文学会 1991

- J-9 南田みどり訳・解説 「ティンペーミン著『ビルマで何が起こったか』をめぐって」 『大阪外国語大学アジア学論叢』創刊号 大阪外国語大学アジア研究会 1991
- J-10 中村平治 『南アジア現代史1』 山川出版社 1977
- J-11 根本敬 「ビルマ抗日闘争の歴史的考察」『東南アジアのナショナリズムにおける都市と農村』 東京外大AA研 1991
- J-12 大形考平編 『日中戦争とインド医療使節団』 三省堂 1982
- J-13 『ビルマ史年表』 大阪外国語大学ビルマ語研究室 1960
- J-14 大阪外国語大学アジア研究会 『アジア現代史年表』 1989
- J-15 スターリング・シーグレーブ 田畠光永訳 『宋王朝』 サイマル出版会 1985
- J-16 R.A.スカラビーノ編 鎌田光登訳 『アジアの共産主義』 鹿島研究所出版会 1967
- J-17 ロイス・ホイラー・スナー編 高橋正訳 『抗日解放の中国』 サイマル出版会 1986
- J-18 トンプソン、アンドロフ共著 大形孝平訳 『東南アジア』 弘文堂 1951
- J-19 ティンペーミン 南田みどり訳解説 「戯曲、ティンペーミン「新しい時代がある」をめぐって」 『現代アジア社会の研究』 大阪外国語大学アジア研究会 1982
- J-20 ティンペーミン 『東より日出するが如く』 井村文化事業社 上巻中巻1988 下巻1989
- J-21 森山康平、栗崎ゆたか 『証言記録大東亜共栄圏—ビルマ・インドへの道』 人 物往来社 1976
- J-22 泉谷達郎 『その名は南謀略機関』 德間書店 1967
- J-23 太田常蔵 『ビルマにおける日本軍政史の研究』 吉川弘文館 1967
- J-24 フリーマントル 新庄哲夫訳 『CIA』 新潮社 1984
- B-1 Aung Tun "Thein Pe Sahkan hma Than Tun Sahkan dho" 1945. Yangon
- B-2 Bamaw Tin Aung "Yoma Taikpwe" 1963. Yangon
- B-3 Bo Ta Ya "Hsan Nweu" 1968. Yangon

- B - 4 Bo Ta Ya "Thwe Udan" 1973. Yangon
- B - 5 Dagon Shwe Hmya "Myanmar Naingngan Sapehsumya" 1972.
Yangon
- B - 6 Luda U Hla "Yebaw hnit Nyima" 1968. Mandalay
- B - 7 Luda U Hla "Dhadinzamya Pyawpyade Sittwin Bamapye" 1968.
Mandalay
- B - 8 Man Nyunt Maung "Thein Pe Myint Youkpounghlwa" 1980. Yangon
- B - 9 Ma Lay Loun "Pwin" 1963. Yangon
- B - 10 Malihka "Myanmar Sapay Abeikdan" vol.2 1974. Yangon
- B - 11 Myawazi "Thwechaung ga Shan" 1964. Yangon
- B - 12 Saw U 'Mr.Kitamura' "Shumawa" No.83, Apr. 1954. Yangon
- B - 13 Saw U "Tamoe Thauktho" 1962. Yangon
- B - 14 Sein Myint: "Hnit Hnaya Myanmar Naingngan Thamaing Abeikdan"
1969. Yangon
- B - 15 Thakin U Thein Pe "Kotwe Hmattan" Yangon
- B - 16 Thakin Mya Than "Do Amyodha Taingpyi" 1973. Yangon
- B - 17 Thakin Tin Mya "Phethsit Tawhlanye Htanajouk hnit Tainghsetaing"
1976. Yangon, 3rd ed.
- B - 18 Htay Maung "Taikpwe Khawthan" 1965. Yangon
- B - 19 Tekkatho Han Win Aung "Matla Hnahsekhan" 1966. Yangon
- B - 20 Thein Pe Myint "Tet Hkit Natsoe" 1940. Yangon
- B - 21 Thein Pe Myint "Lanza Pawbyi" 1949. Yangon
- B - 22 Thein Pe Myint "Chitywe Hkawya" 1952. Yangon
- B - 23 Thein Pe Myint "Tawhlanye Kala Naingnganye Atweacoungmya"
1956. Yangon
- B - 24 Thein Pe Myint "Kyaw Nyein" 1961. Yangon
- B - 25 Thein Pe Myint "Sitatwin Hkayidhe" 1966. Yangon
- B - 26 Thein Pe Myint "Sapay Swenwebwe" 1975. Yangon
- B - 27 Thein Pe Myint "Kywundaw i Achitu" 1974. Yangon

- B-28 Thein Pe Myint "Tet Hkit Tet Lu Tet Hpoungji Thein Pe" 1975.
Yangon
- B-29 Thein Pe Myint "Sapay Bawa Zatlanzoung" vol.3 1981. Yangon
- B-30 Thein Pe Myint "Wuhtudo Baungjouk" 1966. Yangon
- B-31 Bohmu Chit Kaung "Ahnit Nahse" 1960. Yangon

以上

Thein Pe Myint's Anti-Fascist Action and His Novel

Midori I. MINAMIDA

The political actions by Thein Pe Myint have been estimated in various way in Burma. But it seems that his actions in the World War II are estimated in the same way. It is said that he tried to promote mutual understanding between United Nations and Burmese people. It is also said that it was the most glorious period in his life.

By the way novels are his most favorite genre in the literature. In spite that many Burmese novelists wrote on that period, he did not write his glorious period in his novels but in non-fictions. Is it impossible for him to write the period of stranger fact in novels?

In this paper I tried to inquire the possibility of the novel on such period closely through Thein Pe Myint's Indian days.

The contents are as follows.

- 1 Anti-Fascist actions in Burmese novels
- 2 Thein Pe Myint's Anti-Fascist actions in Burma 1941.2-1942.7
- 3 The reflection of his actions in his novel—"As Sure as the Sun Rising in the East"

- 4 Thein Pe Myint's Anti-Fascist actions in India 1942.7-1945.3
- 5 Thein Pe Myint's Anti-Fascist idea never seen in other Burmese novels